人食いダンジョンへようこそ!
Welcome to maneater Dungeon
bigginig novels series
Volume 3
【小説】一年新
story by hitotose arata
【イラスト】しりー
illustration by siri
試し読み版
BEGINNING NOVELS

Contents

beginning novels series welcome to maneater dungeon

story by hitotose arata - illustration by siri

3

序章 悪党の巣窟へようこそ！――7

第一章 過去の幻影――9

第二章 朝食を二人で――55

第三章 はがれた仮面――86

第四章 乳母の願い事――158

第五章 その首を落とせ――171

第六章 じゃじゃ馬慣らし――214

第七章 華麗なるレース――228

第八章 ダンス・マカブル――260

第九章 舞台を去る者――287

終章 そして、迷宮の果てへ――328

書き下ろし 終話：未来への道しるべ――341

特別付録 カバー・キャラクターデザイン案――353

序章　悪党の巣窟へようこそ！

……だから、悪いことは言わないから、人知れずこの街を離れるか、僕の庇護下に入ったほうがいいと言ったんだ。僕は君を高く評価しているし、いい友人になれるかもしれないと思ったんだ。これは本当だよ。

美人だなとか、色っぽいなとか、まったく思わなかったことがないといえば……まぁ、嘘になるけどさ。君も知っての通り、僕は女性に飢えているわけではないし。

……いや、その。うん、気持ちいいことは当然好きだから、女の人を抱くのは好きだよ。

無理やりっていうのは、あまり好きじゃない……そんな顔をしないでくれよ。好きじゃないことと、それをしていることは両立してしまうんだ。

今更隠しておく必要もないから先に言っておくけれど、僕は他人を魔物に変えることができる。その上で、魔物にした相手を支配することができる。

……まぁ、全部正直に言っているとは思わないだろう？

僕のことを悪魔と呼びたければ呼べばいいし、その言葉を否定する術を僕は持っていない。生き残るためだとはいえ、直接は少なくても、間接的に何人もの人を殺したのは間違いない。何人もの女性を魔物にしたよ。君もよく知っている、ダリアも魔物だ。

……驚いているね。外見からではわからない？

あぁ、その顔はどうやら気がついたようだね。

そう、エブラム領主の姪にして聖堂騎士のオリヴィア嬢を危機から救うきっかけとなった地元民というのは、誰でもない僕のことだ。ちなみに、その情報は半分でしかない。

もう、わかっているだろう？

退治されたことになっている人食いダンジョンの主というのは、誰でもない僕のことだ。

まぁ、色々あってオリヴィーとは和解して……あぁ、言ってなかったね。僕とオリヴィーは昔からあの村で遊んでいた知り合いなんだよ。十年近く会っていなかったから、あの子がダンジョンの魔物討伐の指揮官になったと聞いたときには本当に驚いたけれど。

あの子は逃げることができなかった。

あの子は暗殺の危機にさらされていた。それでも、暗殺を指示していたのは……それはもう、君自身が一番よく知っているだろう？

さぁ、改めて聞こう。この世の中はきれいじゃない。この水門都市エブラムにも、表の顔も、裏の顔もある。君は今まで表の世界で生きてきて、望まず裏の世界を垣間見て、一歩踏み込まされてしまった。

それは僕が望んだことでも、君が望んだことでもないのは理解してもらえるよね。

この街は蜘蛛の巣みたいなものさ。遠くから見ればきれいだけれど、どこもかしこも獲物を狙う罠ばかりだ。君のような人は、いわば蜘蛛の巣に掛かった蝶のようなもの。

これから先の選択肢は、食われるか、君も蜘蛛の仲間になるか。僕が提示できるのは、この二つしかない。

このまま、本当に死が訪れるのを待つというならば、惜しいけれど止めはしない。

でも、もし。悪党である僕に、少しでも好意を持ってくれていて、少しでも信じてくれたのなら。こっち側に来ることは、不可能ではない。

まぁ、色々とやることはあるのだけれど。君にとって嬉しいことかどうかまでは保証できないけれど、半ばは僕の女になるということだからね。

あまり悩む時間はない。

さぁ、決めてほしい。その上で、僕は君が欲しい……だから、こう言わせてもらうよ。

……ようこそ、蜘蛛の巣の街へ！

第一章　過去の幻影

ヌビアとネムが僕の魔物になって、一週間ほど過ぎた。

ゴードンのサーカス団は花形であるネムを失い苦労していたようだが、逃亡者であるヌビアに関しては知らなかったということにして一応お咎めなしとなった。

もっとも、ヌビアが賞金首なのはエブラムでもこの国でもなく、交戦中の隣国の話だ。エブラムの兵士たちに取り締まる権利は本来ないものだから、お咎めも何もない、というのが正直だろう。

サーカス団は予定の滞在期間を少しだけ前倒しし、次の都市へと移る準備を始めた。

珍しくギュスタープ爺さんもエブラムに残っていたので、ゴードンと僕との三人で別れの席を設けることになった。

「ゴードンはもう気づいているとは思うが、エリオット。数日前から、お前らの近辺を誰かが嗅ぎ回ってるぞ」

酒も回ってきたころに、ギュスタープが突然つぶやいた。

「は？」

一気に酔いが醒めた。

「あぁ、エブラムの……オリヴィア嬢ちゃんのところじゃないっぽいんだが、実際のところはわからん。きな臭いんで、早めに退散させてもらうことにしたんだ」

と、当たり前のようにゴードンが返す。一応警戒しているつもりだったけど、まったく気がつかなかった。

ここ数日は蜘蛛の巣館に顔を出した以外に裏の仕事はしていないから、怪しまれることはないと思うが……シロを身の回りに置いていないことが仇になったかもしれない。

それにしても、なんで僕のことが。魔物のことがどこから漏れたのだろうか？

「身に覚えがないんだけど……」

僕の声は震えてはいなかったと思う。前から正体を

知っているギュスターブはともかく、ゴードンにはまだばれていないと思う。
　杯を飲み干し、ギュスターブが言葉を続ける。
「俺の傭兵団の連中の所にも、この数日で魔法道具商人のエリオットの噂を聞きに来た奴がいる。どっちも傭兵風の奴だったらしいが、別の奴が別の相手に二回」
「……傭兵の所に、魔法の武具の話を聞きに来るのは普通じゃないのかい？」
　自分でも違和感を覚えながら、ギュスターブに問いかける。考えれば結論が出るかもしれないが、結論を出している相手が目の前にいるんだ。聞いてしまっても損はない。
　……その上で、鵜呑みにするのは危険なのだけれど。
「お前の店、この街で噂話のレベルでご指名を受けるほど有名か？」
　言葉もない。売り出し中ではあるが、まだ店の売り上げや知名度は今の蜘蛛の巣館にすら及ばない。
「それに、普通は魔法の武器の入手先を聞きに来るもんだろう。なんで店を決めうちで聞きにこなけりゃいかん？」
　ゴードンがビールを飲み干し、あきれたように言う。
「エリオット、お前ヌビアに武器を渡してただろう。それに、娼婦を紹介していただろう。この街でヌビアが一番親しかったのはお前さんだよ……それに、ネムも」
　それで得心がいった。まだ疑いは晴れていないのだ。いや、ヌビアたちとの接点が残ったままだったことに、僕は無頓着だったのだ。ここは人里離れた荒野ではない。人が住み、多くの人目がある都市だということを肝に銘じなければいけない。
　そして、調査をしているのはオリヴィアの目の届いていない勢力……他の勢力の可能性もなくはないが、おそらくはランベルト家だろう。
「痛くもない腹を……まぁ、何もないとは言わんが……探られるのは具合が悪い。なんで、早めにさよならってことさ。エブラムはそこそこ稼ぎがいいから、ちょいと惜しいんだがな。次は西のパルミラでも目指すかねぇ」

※　※

翌日、店じまい間際にライラが店に立ち寄った。彼女が来るのは、ヌビアが消えた翌日に聞き込みに来て以来だ。

「……やぁ、エリオット。ダリア」

「いらっしゃいませ、ライラさん」

ダリアがいつもの通りに挨拶を返す。ライラは何か疲れ気味だ。

いつものように他愛ない世間話をしたあと、こちらから話を振ってみることにした。

「どうしたんだい？　疲れているようだけど……ヌビアの件は、まだ調査中なのかい？」

自分としても、貸し出した魔法の武具を持ち逃げされた形になるのだから、ある程度気になるふりをしていないといけない、ということもある。

それに、どの程度状況をつかんでいるのか、ライラが僕を疑っているのか、表情から見えてくるものがあるかもしれない。

「あぁ、水路から出ていく小舟の目撃証言がある。おそらく、エブラムからは逃亡した……と見ていいだろう。私個人としては、まだ確証は持てないんだけどね」

それはライラの勘なのか、何か物証があるのか。

「何か、気がかりなことでもあるのかい？　僕としては何か暴力を振るわれたわけではないし、貸していた武器を返してもらえれば文句はないんだけどね」

「君も被害者だからな……。いや、これは確証があるわけではなく、単に勘みたいなものだ。聞けば、あのヌビアという男は、かつて殺した女の娘を育てていたというではないか」

「……あぁ、ネムのことだね。ずいぶん、ヌビアになついていたように見えたよ」

「どういう関係だったのか、どういう人物だったのか、私にはわからない。だが、仲良くあった……親子のような関係の相手を置いて逃げられるようなものなのだろうか？」

「……僕には、わからないな。一緒にいれば危ないと思ったのかもしれないし、足手まといだから置いていくことにしたのかもしれない。当人たちのことは、た

ぶん当人たちしかわからないよ」
　そういえば、ネムは行方不明ということになっていたけれど、一般にはどう見られているのだろう？
　ヌビアと共に逃げたのだと考えてもらいたいのだが……
「……あぁ、そうだ、な。すまない、私はいらないことを考えすぎているみたいだ」
　ライラが顔を上げ、軽く頭を振る。やはり、目元に力がないように見える。
「ライラさん、お仕事はお忙しいんですか？」
　ダリアが奥から冷やした水を持ってきてくれた。
「ああ、ダリア、ありがとう。……これは、いいな」
　ライラの表情が目に見えて変わる。暑い盛りは過ぎたとはいえ、実りの季節まではまだ早い。刻んだ果実を入れて、少しだけ香りが付いた冷たい水。ダリアが誰かから聞いてきて作ってくれたのだが、暑い時期にはとてもありがたい。水を冷たいまま保管できる容器とか、作れないものだろうか……魔力も溜まってきたし、今ならやり方のヒントさえわかれば案外作れるかもしれない。
「ええ、神殿にお参りに行ったときに、親切な方から教えていただいたんです」
　そんな所に行っていたのか。休みの時間帯は自由にしていいと言ってあるし、ダリアにはもっと自由に過ごしてほしいと思っていたから、喜ばしいことなんだけれど、ちょっとだけ意外だ。
「あぁ、神殿か……そういえば、最近は公務以外では行っていないな。たまには挨拶に行かないと。……それにしても、エリオットは果報者だな」
　ダリアが少しだけ頬を染め、ライラが笑う。
　ライラは僕たちの関係を、健全な恋人だと思っているのだろう。
「さて、長居しすぎたか。すまないね、長々と邪魔をしてしまって」
「いやいや、ライラさんの噂話もこっちには商売の種になるからね」
　そのタイミングで、シロが戻ってきたことがわかる。

ライラがまだ店内にいるため、遠隔でしばらく待機するように指示しておく。
「では、また寄らせてもらうよ。買い物ができるくらいのゆとりがあればいいんだが、ね」
苦笑しつつライラが帰ると、少しの間を置いて入れ替わるようにシロが帰ってくる。
「ご主人様ぁ、今の人、男の臭いがしました」
シロが言う今の人とは、間違いなくライラのことだろう。男の臭い……？
「それは、どう言うことだい？」
「その……男の人の、精液の臭いですぅ。ちゃんと拭いてると思いますけど……」
シロは嗅覚が鋭い。おそらく、人間では気がつかないレベルの臭いまでかぎ取った結果の報告なのだろう。
「ライラは勤務からの帰りのはずだ。僕の店に寄る前に誰か男の所に寄ったのか……？」
あの生真面目なライラが、勤務中にそういうことをするとは考えにくい。
怪訝な顔をしていたのだろう僕の後ろで、ダリアが小さい声でつぶやく。
「ライラさん、もしかして……」
「ダリア、何か気がついたことがあるのかい？」
僕にはわからないことがダリアにわかったのだろうか？　少しためらったあとに、ダリアが言葉を続ける。
シロは、ライラが飲んでいた水の入ったコップを手に取り、臭いの確認をしている。
「今日のライラさん、なんだか悲しそうな顔をしていました。今までにも、時々あったんですけれど……。わたしとマスターのことを話すとき、あの人は、すごくまぶしそうにこっちを見るんです。だから、もしかして……」
「ご主人様ぁ、やっぱりですぅ。ミントとかで消してあるけど、コップにも残ってます。お口でもしてあげてるんですね」
……僕は何かを見落としている。
ランベルト家の騎士ライラ。生真面目で、馬術の技量にも長けた美しい騎士。
そのくせ自己評価は低く、領土も持たない、罪人の

父を持つという彼女……もしや、ライラはランベルト家の中で誰かに抱かれているのではないだろうか？
ライラがベタぼれしている可能性もあるが、仕事中にライラがそれを許すというのも考えにくい。
そう考えると、そんなことができるのは、おそらくはごくわずか。ライラは、ランベルト家の当主か、次期当主の妾なのだ。
それも、おそらくは望まぬ形での。

※　※

「……あなたの推測は、おそらく正しいわね、エリオット。騎士ライラは、一部の騎士たちか〝ベッドで騎士の座を得た〟なんて言われることもあるみたい」
翌日。サラの家の魔具を使って、サラとオリヴィアと連絡を取る。
この時期に、僕がこの二人と接触していることを知られるのはあまり望ましくない。もちろん、サラと商売としての取引は続いているので、家に行くことはあるが、長々と喋ると怪しまれる可能性もある。
オリヴィアには、以前からライラのことを調べてもらうように頼んでいた。その結果も、ダリアの予想を裏付けるものだった。
「ライラ・ハルバニア。下級貴族ハルバニア家の長女。領地はランベルト家の現当主が管理しているわ。……ハルバニアはランベルト家の一派とされる騎士の家柄で、先代が十年ほど前に戦地で亡くなっているの。長男は同時に死亡していて、ライラが現在唯一の家督相続権を持つ人物ね」
オリヴィアは、かなり調べてきてくれていたのだろう。
「ライラは、自分が罪人の子と言っていた。それに関しては？」
「これは、確証があるわけではないけれど……ハルバニア卿は戦場で敵軍と内通したという噂があるわ。……当時を知る人に聞く限りでは、ハルバニア卿は実直な方でそんなことは信じられない、という話だったけれど」
後ろのほうで、つまらなそうなため息が聞こえる。
サラは既にオリヴィアから話を聞いてるようだから、

この話の結末を知っているのだろう。そして、その結末はサラにため息をつかせる類のものだということか。
「謀殺……かい？」
「証拠はないのよ。ハルバニア家はランベルト家の旗のもとに集う家柄だったから、実際のところ、何があったのかもわからない。書類上、家を継ぐ者がいなくなって、まだ子供だったライラが家を継ぐ……正確には、彼女が夫を娶るまでは、財産や領地はランベルト家が管理する。そういうことになってるの」
　オリヴィアの声は、そう言いながらもほぼ確信している声色だった。ランベルト家は、オリヴィアに対しても同じようなことを仕掛けているのだから、当然といえば当然か。
「……当時は、ライラも十歳ちょっとくらい。世間のことも知りようがない、かな？」
　ライラがあれだけ生真面目な性格を保っていられるのは、死んだ父や兄を信じているからなのか、それとも憎んでいるからなのか、正直判断は付かない。
　裏表のない人だと思っていたけれど、それは僕の見る目がなかっただけか。僕の沈黙を読み取ったのか、オリヴィアは僕をそそのかすように言葉をつなぐ。
「噂の評価は最悪だけれども、実績と実力の評価は高いのよ、彼女。……エリオット、彼女のことが欲しくなったんでしょ？」
「……あぁ、最初は、敵にしたくないなとだけ思っていた。途中から、巻き込まずにすめばいいなと思っていた。でも、今は違うね」
「騎士ライラは有力な戦力よ。その忠誠心はランベルト家にだけ向けられていると見たほうがいいわ……もし、何かがあった際に敵に回ったら、やっかいな相手。でも、もし彼女を味方にできたら？」
　……オリヴィアは、本当に僕と似ている。僕の思考を読むのに長けているのかもしれないが、僕がこれから言おうとしたことを、そのまま先に言ってきた。
　今度は、僕が答える前に向こう側からサラの声が聞こえた。
「あんたたち、ほんっとに似た者同士よね。あと、お互い内心隠すのも無駄だからやめなさい。特にエリ

「鉱山村の生き残りだということは聞いている」
一言で切り込んできた。回りくどいことはしないタイプか。しかし、その言葉に意味はどこまで込められているのだろう。
「あの村で起きた魔物の発生について、我らエブラムの人間はそれを防ぐこともできず、対処も遅れた。様々事情があったとはいえ、お前にはそんな事情は関係のないことだ」
……！
「……ええ、まぁ」
警戒しなければならない。軽くかぶっているだけだった帽子を直しながら、答える。
何を考えている？
どこまで、何を知っている？
「都市貴族として公式な発言にはできないが、謝罪したいと思っていた。守るべき領民を守れなかったのは、我々の罪だ」
その瞬間、心に残っている壁が一つ突き崩されたような気分になる。
こいつは、ランベルト家の次期当主。事件の糸を引いていた可能性に、最も近い一人だ。そう知らなければ、僕はこの言葉に心から感謝していたかもしれない。
「いえ、そのようなことをおっしゃられましても……」
反応に困る。言葉が多いわけでも、恫喝してくるわけでもないが、やりにくい。
オリヴィアと会話しているときに何か落ち着くのとは逆に、非常に落ち着かない。それでも、会話は進み、話題は変わる。この有無を言わせない感覚は、ルベリオという人物の持つある種のカリスマなのだろうか。
「ならば、これはこちらのわがままだ。聞き流してくれればいい。それに、今日ここに来たのはそれだけが目的というわけでもない」

「目的、とは……」
ルベリオはそうそうと話題を変える。会話のペースがつかめない。
ここにはまだガラティアとライラもいるというのに、そちらに注意を払うことができない。魔法でもなんでもなく、ただただやりにくい。
ギュスターブやゴードン、ジェンマ爺さんのような老獪さとも違う交渉術だ。
「ごく普通のことだ。鉱山村の……いや、魔具商人のエリオット。お前と取引がしたい」

※　※

「この店は、魔法の道具を扱っているとライラから聞いている」
それについてはなんの異論もない。
「パルミラのような大都市にある、学院出の付与魔術師が作った作品とまではいかないと言っていた……とは聞いているが、そもそも付与魔術師がどれだけ多いのか、という話でもあるな。このエブラムには他に魔法の道具を扱う店がないとは言わないが……専門に商う店など、わざわざ数えるほどもないぞ？」
その通り。競争相手は少なければ少ないほど良い。それは、僕が商売を行うのに際して調べたことだ。
「それに、魔法を付与した日用品も商っていると聞く。その考えは私にはなかったし、それを比較的安価に提供するということも同様だ」
ライラに宣伝を頼んだのは僕だ。なので、ここで情報が漏れているのは仕方ない。
「……ええ、おかげさまでそれなりに商いをさせてもらっていますよ。……あぁ、少々失礼。ダリア、すまないけれど奥に戻って湯を沸かしてもらえるかな？」
振り返って、ダリアに言葉をかける。話の腰を少しでも折りたい。会話の主導権を握られたままというのは、性に合わない……
ふと、自分がここまで主導権を握りたがっていたことを自覚する。交渉において、先手を取れないと弱いというのは自分でも予想していたが、この場で自覚したくはなかった。

「ですが……いえ、わかりました」
ダリアは当然ながらガラティア邪眼の持ち主であることも知っており、自分を一人で残していくのが不安なのだろう。
しかし、普通に暮らしている街の住人であり、ライラ以外とは初対面の僕たちはそんなことを知っているわけもないし、それを気取られても逆効果だ。それに、ダリアは僕ほど交渉の場に出た経験がない。言葉尻を取られて情報を漏らしたり、何かを見透かされる可能性が高いのを察してくれたのだろう。一礼すると、ダリアは奥へと下がる。
「ええと、お客様を立たせたままというのもよくないですね。茶を用意させますので、席についてお話を聞かせていただけませんか」
振り向くと、さっきまで圧倒的な存在感で僕を圧倒していたルベリオは僕のことなど見向きもせずに、店に飾ってあった籠手や鍋を手にとって色々といじっていた。
その目つきは、真剣ながら新しいおもちゃを見つけた子供のようで、さっきまで話をしていた男と同一人物なのか疑いたくなるほどだ。

※　※

「エリオット、この籠手は妙に軽いが……」
「軽量化の付与をしていますから、同じ程度の物と比べると一割程度軽くなっています。あとは、わずかながら錆びにくいですが、これは誤差ですね」
「この鍋は何か魔法が付与されているのか？」
「内側にほんのわずかですが、火に対する防護の呪いを施してあります。……本来は、火除けの護符などに使う魔術なのですが、鍋の焦げ付き防止に……」
「あー……それは考えたこともなかった。では、これは……」
次から次へと、矢継ぎ早に質問を繰り出してくる。もちろん、すべて自分で作ったものだから即座に回答できるが、冷静に考えをまとめる時間が取れない。
しかし、この反応はなんというか……
「しかし、不躾な質問になるが……エリオット。君は

儲ける気がないのか？」
「え？　いや、まぁそれなりに利益を出させていただいていますが……」
「君という奴は……。確かに最高品質とはいかないのかもしれないが、これだけの種類の魔法の品をたった一人で扱い、管理できているのは普通じゃないぞ。それに、俺が首都で買い込んだ魔法の剣は、確かに君の作った剣より切れ味がよいのかもしれないが、値段が百倍違うぞ？」
　ルベリオは明らかに興奮していた。さっきまでこちらを「お前」と呼んでいたのが「君」になって、自分のことも「私」から「俺」になり、話し方もかなり雑なものになっている。
　見れば、ガラティアはあきれたような顔をして、ライラは困ったような顔になる。ということは、これがこの男の、ランベルト家次期当主の元の姿なのか？
「エリオット、これは量産できるのか？　軽い武器を、ある程度量産する場合はどの程度の日数で出来上がる？　積載量の多い荷車の魔具はないか？　俺の魔法の剣を売り払って、その分である程度の経験を積んだ兵士や騎士にこの店の武具を配ったほうがよほど効率いいじゃないか！」
「……ルベリオ様、そろそろ落ち着いてくださいませ」
　ガラティアがようやく口を挟み、ルベリオがふと我に返る。
「おお。……すまないなエリオット。お前の店の品ぞろえと値段を見て、勝手に盛り上がってしまった」
　わずかに興奮は残っているようだが、口調も戻った。同様に、あの威圧感も。
　おそらくは、気分の切り替えが恐ろしく早いのだろう。そしてこの男は、戦いというものに関して、僕やオリヴィアとかなり近い考えを持っている。
　一人の英雄ではなく、多くの兵士の強化。いつ出てくるかわからないような英雄が生まれるのを待つのではなく、軍隊を強くして勝つ。同じ戦術を取る相手と戦うことを想定すると、当然ながら物量豊かなほうが

強い。相当にやっかいな相手になりそうだ。
「改めて、確認させてほしい。条件さえ合えば、我がランベルトの兵士の装備を任せてもいいと考えているのだ」
……なっ⁉
「我が主、いくらなんでもそれは唐突すぎでは……」
「ライラ、それはあなたの判断するべきことではありませんよ？」
ライラも、その一言には慌てたようで、ガラティアにたしなめられている。
「さすがに、すぐ品をそろえるというのは難しいですが……」
これは紛れもない事実だ。
「ふむ。たとえば、十名の兵卒に軽量な銅鎧、兜、槍と丸盾を用意するとなった場合なら、どの程度かかる？」
即座に、具体性を持った質問が飛んでくる。
値段を聞かないということは、そこは気にするなと言っているのか、値段によって時間が変わる可能性も考えているのかどちらかだろう。
「これは金額が多くなったからといって、時間を早めることができるかというとそういうものではありません。その、入荷にも時間がかかりますので……おそらくは、一月から一月半程度は」
実際には、在庫から見繕えばすぐだし、同じ性能の物でそれだけに取りかかるのならば時間は半分もかからないだろう。
それでも、在庫ゼロの状態から作ることもありえるし、ジェンマ商会経由の発注もあるのだからそればかりに関わってはいられない。
「……ジェンマ商会経由で受けた依頼を後回しにするとしたら？」
「……それならば、一月以内に」
ジェンマ商会から情報を得ていることを、ここで明言してきた。この男は何を狙っているんだろうか。
「なるほど、間違いないな。エリオット、君だな？」

※　※

「何が……でしょうか？」
　正体がばれたのか？
なぜ？　本当に正体なのか？　別のことか？　ブラフか？
　心臓が早鐘のように鳴るのを止められない。顔にだけは出さないように、落ち着いた声を出そうと全力を傾ける。
「……商売人としては、やはり若いのだな」
　若さでいえば、お前だってあまり変わらないだろう。内心で強がっても、相手に届くはずもない。
「我が家は都市貴族の中でも商人とのつながりがそれなりにあってな。このエブラムを定期的に訪れる行商、隊商の出入りはある程度管理している」
　何を言おうとしているのか。考えろ、考えろ。聞き逃すな、考えることを止めるな……
「他の魔具を扱っている店にも確認しているが……注文を受けてから、たった一月でそれだけの物をそろえるのは無理だ。魔法に関わる品の多いパルミラとの間は、隊商が往復すればどうやっても一月近くかかるのだからな。しかも、普通の隊商はたいてい、その間のいくつかの都市で数日過ごすものだ」
「……！」
　パルミラまでは、街道沿いの駅を利用し、馬を取り替えていけば片道一週間はかからない。だからこそ、余裕を持って一月としていたが……それは、あくまでも記録上の最短。
　実際にパルミラに行ったことがない僕は、動きの鈍重なキャラバンがどの程度遅くなるかの予測ができていなかった。しくじった……！
「それは……」
「偽っていたことを責める気はない。商売上必要なこともあるのだろう……だが、これは確認だ。お前が、店の品を作り出している付与魔術師だな？」

※　※

「……参りましたね、そこまで見抜かれたのは初めてだ」
　内心、安心していなかったといえば嘘になる。そっ

ちは、まだばれてもいいところだ。
「ほぼ独学ですし、パルミラの学院なんて行ったこともありませんよ。ですが、付与魔術が使えるのはその通り」
「どこで、お学びになられたのかしら？」
ここで初めて、ガラティアが問いかけてくる。
目を合わせようともしていないが、かえってそれがありがたい。そちらを少しだけ向いて、自然な形で目を合わせないようにして答える。
「死んだ母親が、もともと旅の魔術師でした。父親は知りません。火の玉を飛ばすとか、そういう魔法の才能はありませんでしたが、物に魔法を込めることだけは、少しできました」
これも嘘だが、調べようもないだろう。そもそも母はこの国の人間でもないし、故郷は既に滅んだあとだ。
「……だからこそ、村から出ても生活をすることができました」
これで、鉱山村に住んでいたエリオットの情報を調べることはできなくなった。
「そういえば、お前はエブラム伯の姪であるオリヴィア殿と知り合いだったようだな。鉱山村の魔物を退治するときに、オリヴィアを救ったという魔法使いと取引があるようだが、その辺の絡みかな？」
くそ、そっちからきたか。そっちは、ゴードンに話したことと同じことを答える。
「あれは、ほぼ偶然……ですね。あの近辺を行商で旅していたときに、逃げてきたサラさんを偶然助けることになったんですよ。僕がしたのは、食事と水を与えて、鉱山村の抜け道を教えたくらいで……そこから先は、オリヴィア……様と、サラさんと兵士のみなさんの活躍でしょう」
「なるほど、つまらぬ詮索をしてしまったな。許せ」
……引き下がった。ひとまずは、助かったか。
「ルベリオ様、これなのですが……」
視界の端でガラティアがルベリオに何か問いかけている。
「あぁ、うむ。エリオット、すまんが、これはなんだ？」

「ええ、どれでしょうか……っ？」
追及がやんで、油断していたのは間違いない。
だが、僕はもっと大きなミスを犯した。ここにいる相手は、ルベリオだけではなかった。
そして、今の合図を見る限り、ルベリオは意図的に僕にプレッシャーを与えて、注意を集めていた。
それは、交渉におけるちょっとした工夫程度のものだろう。ある意味、自分を囮にして……ガラティアの存在を忘れさせていた。
そちらに顔を向けた僕が見たのは、赤く目を光らせるガラティアの顔。……邪眼使いガラティアに、無防備に向き合ってしまったのだ。

※　※

「あなたは動けない。呼吸も会話もできるけれど、逃げることもできず嘘もつけない。大丈夫、おかしなことをするつもりはないわ」
クスクスと笑うガラティア。整った顔に、嗜虐的な笑みが浮かぶ。まずい……ディアナの身体を使ったときには避けることもできたのに、まともに魅了されているのがわかる。
思考力が落ちる。考えがまとまらない。中途半端な体勢のまま、身体が動かない……
パサリと、深くかぶっていた帽子が落ちる。ライラの、ガラティアの、ルベリオの目つきが同時に変わる。
……魔力と同様に、顔も知らない父親から残されたもの。僕が人ではなく魔族との混血であることを示す、額の角が露わになっていた。
「っ⁉」
ルベリオが、ガラティアが、何よりもライラが一瞬で反応し、警戒を露わにする。
無理もない。魔物はこのエブラムでは何年も見られていない……もちろん、公式にはだが。
都市を出て、農村や山岳地帯に行けば黒妖精コボルトによる被害はよく聞く話だし、沼沢地や洞窟などにはインプやゴブリンの小規模な集落などがあることは知識としては知られている。
それでも、この国は教会勢力の強さもあってか、魔物による大規模な被害はめったに発生しないし、魔物

が生活を脅かすというのは、山賊や大型の野生動物に遭遇するのと比べても少ないだろう。
遺跡や古い時代の墓地などには、戦乱の時代に作られたゴーレムやスケルトンなどの不死の兵隊が未だに動き回り、そこに残されたわずかな宝を求めて冒険者たちが旅に出る。
とはいえ、そんな遺跡が大量にあるわけでもないし、かつて多くの冒険者の命を奪った迷宮も、その多くは踏破され、破壊されている。
冒険者たちの時代も終わりつつあるのだと言われて久しい。
この国においては、街道を旅する限り、魔物に襲撃される可能性は盗賊団に襲われる可能性よりも低い。
冒険者の主な仕事も遺跡荒らしから護衛や荒事が主になりつつあり、傭兵団と次第にかぶりつつあることから、両者はそのうち一つになるだろうと言う者までいる。だからこそ、鉱山村の人食いダンジョンはあそこまで有名になった。

「エリオット、君は⁉」
ライラが青い顔をして、それでも一瞬でルベリオと僕の間に割って入っていた。街中なのだから、当然鎧など着ているわけもない。それでも、騎士としての習慣は主君を守るための壁とさせていた
彼女が持つ護身用の小剣は既に抜き放たれ、僕に向けられているが、その切っ先はわずかに震えている。
答えようにも、声が出ないのだけれど、目線だけを合わせて……どんな顔をすればいいのかわからないことに、そのときになって気がついた。きっと、僕はずいぶんと困惑した間抜けな面をさらしているのだろう。
「ライラ、その男は動くことも、声を発することもできませんからご安心なさい」
そう声をかけたのはガラティア。少しだけ慌てていたかもしれないが、既に落ち着きは取り戻している。自分の邪眼の効き目に自信があるのだろう。……確かに、身動きも取れないので何も言い返せないのだが。
「まさか、いきなり正解にたどり着くとは思ってもい

ませんでしたが……。エリオット、答えなさい。あなたは魔物ですか？」
答える必要もないと思いつつも、気がつけば自分の口が答えを告げている。
「……半分は、魔物だ。半分は、人間だと思っている」
催眠状態に入っているのか、意識が残っているのに自由が利かない。
ガラティアの質問内容がまだ大きいくくりでの確認のために、細かな答えをしていないが、いずれ細かく聞かれれば僕の正体がばれる。
それに、ルベリオがどう動くかもわからない以上、僕の命がいつ奪われてもおかしくない。
通じるのかわからないが、店の奥に引っ込ませたダリアにとにかく逃げるように指示を飛ばす。このままでは、全滅だ。アスタルテ、シロ、サラ、ディアナ、ネムとヌビア、ミヤビにも危険を知らせるが、果たしてこの思考が外部に出せているのかはわからない。
直接僕が魔物にした女たちには思考を届けられるのだが、ネムを通じて間接的に魔物にしたヌビアや支配はしたが元から魔物だったミヤビにこれが届くかは疑わしい。ドーラや蜘蛛の巣館の女たちは僕が魔物にしたが、もともと僕の正体を知らない彼女たちにこの状況を知らせる気もない。
……どちらにせよ、この店に助けを呼んでも意味がない。いや、ここでガラティアとルベリオを殺しておけば、オリヴィアの命を狙う相手の主力はいなくなる。既に立場を得てしまったサラを呼ぶわけにはいかないが、やってみる価値はあるか……？

「エリオットが、半分魔物……？」
ライラの声は、今まで信じていたことが崩されたからか、悲しげに響いた。
「ライラ、あなたは利用されていたのです……エリオット、答えなさい。使用人の娘は魔物ですか？」
「……ダリアは、魔物だ」
ライラの顔が引きつる。ルベリオは少し考え込む。
ガラティアも少し言葉を止め、新しい質問を発する。
「エリオット、答えなさい。あなたがこの……」

その瞬間、店の奥、地下水路に向かう隠し扉のあたりから大きな音が響く。荷物の山を崩したような音。何があったんだ⁉

「ライラ、行け」

ルベリオが落ち着いた声で命令し、ライラは苦しげな表情のまま、即座に店の奥に駆け出す。彼女はそこで、ダリアと談笑しながらお茶の準備を手伝うこともあった。その記憶が、これから起きるであろうことの予測を邪魔しているのかもしれない……そろそろ、そこに隠された地下水路への扉を見つけていることだろう。

「エリオット、そこで待ちなさい」

ガラティアもライラの後を追う。ルベリオも同様。……今がチャンスか？　いや、ダリアは何をしたんだ⁉

ダリアは僕が魔物にした相手だから、その気になれば身体を支配して動かすこともできる。しかし、そのためには精神を集中させることが必要で、ガラティアに支配された状態ではそれもままならない。

そのとき、今度は地下から別種の轟音が響いた。

ライラの上げた悲痛な怒号。叫び声は、おそらくはミヤビのものだろう。

激しい水音、爆音。その瞬間、身体を縛り付けていたガラティアの呪縛が解けた。動こうとしても動けなかった身体が急に自由を取り戻し、バランスを崩して床に膝をつく。

「これは……」

地下水路に向かおうとしたそのとき、店の入り口に誰かが来たような気がした。その次の瞬間には、頭をつかまれ、顔面を床に叩きつけられていた。

※　※

視界が急に角度を変え、床だけしか見えなくなる。その端に、見覚えのない誰かの靴。わずかな薬品臭。鼻の奥に熱を感じる。口の中を切ったのか、しょっぱい血の味が広がる。

「ふふふ、ふふふふ？」

耳から入ってくる音は、まるで洞窟の中にいるかのように妙な反響をしているが、僕のすぐ近くで、小さ

い声で笑っている誰かがいることだけがわかる。
男とも女ともわからない、甲高い笑い声。
入り口から入ってきた誰かに、気がついた瞬間には背後を取られ、頭をつかまれて床に顔を叩きつけられたのだと理解するまでに数秒かかった。
そのときには既に両腕をつかまれており、腕の自由も利かない。背中に体重がかかり、呼吸ができないほどではないが、起き上がることもできない。
「ふふふふふふふふふふふふ……耳、切っていい？　いいよね？」
囁くような声がすると、右耳に冷たい感触が当てられる。刃だ。一気に切り落とすのではなく、焦らすように、楽しむように皮膚を薄く切り、小さな切れ込みを何ヶ所にも入れてくる。
……なんだ、これは。何があった⁉
痛みはたいしたものではないが、理解できない状態に頭が混乱する。片手で頭をつかみ、片手で両腕を押さえ、片手で耳を……⁉
計算がおかしい、どういうことだ？
腹の底から、何か冷たい感触がせり上がってくるのがわかる。これは、恐怖だ。今までの会話の中での緊張と恐怖とはまた別種の、即物的な痛みと、謎の乱入者に対する恐怖。
まずい、パニックを起こしたらこの乱入者の思うつぼだ。
「貴様、何者だ⁉」
すぐ近くでライラの叫び声が聞こえた。地下水路側からライラたちが戻ってきたのだ。
ダリアはどうなったのだろう。ミヤビは、ダリアは無事だったのだろうか。僕の後頭部をつかむ手は、まだ力を緩める気配すらない。
「……そこまでにしておきなさい」
この状態から僕を救い出したのは、奇妙なことにガラティアだった。
「ふふふ？　……つまんないの……」
その言葉を残し、僕を押さえつけていた手がすべて離される。

「三号、勤めに戻りなさい」
「ふふふ……？」
僕に見ることができたのは、扉の隙間をすり抜けるように店を出る小柄な男。だぶだぶの衣装をまとっていて、体格……腕の数は把握できなかった。
「ガラティア殿、今の男は……？」
「ライラ、あなたが知る必要はありません。……敵ではないとだけ理解しなさい」
ガラティアはサラが持つ物と似た短杖を懐にしまいながら、ライラのほうを見もせずに言う。そうか、調査に送り込んだ暗殺ギルドのメンバーを殺した奴の一人があの「三号」と呼ばれた男なのだろう。つまり、ガラティアが集めた暗殺者たちの一人だ。
おそらく、僕が何か動きだすことを警戒して入り込んできた……ガラティアが護衛として隠れさせていたのだろう。
後ろに控えていたルベリオが、そのときになって口を開いた。
「エリオット、すまんな。お前を多少疑っていたという事情もあって、ライラとは別に護衛を付けていたのだが……護衛が少々血気盛んだったようだ」
軽い謝罪よりも、僕を疑っていたという一言が気になった。
そんなことはもうわかっている。疑っているではなく、疑っていた。そう言ったのには意味がある。そして、それは本来僕に知らせる必要のない言葉のはずだ。
「わかっているかもしれんが、お前は利用されていた」
それは、どういうことだ？
その瞬間、いやな予感が……いや、考えたくない思考が組み上がる。
見れば、ライラは少し怪我をしている。なぜか、手に持っているのは剣ではなくうちの帳簿だ。ルベリオとガラティアは無事だが、多少埃をかぶっている。明らかに不必要に立てられた大きな音。ミヤビによる攻撃。ガラティアが呪文行使のための短杖を取り出していたこと。
即座に戻ってきたのだから、おそらく戦いがあって

もすぐに終わっている。お互いにたいした傷は負っていないだろう。音を立て、姿を現したのはなんのために？

　あぁ、簡単だ。ダリアは、僕のやり方を今までずっと見てきたのだ。僕の、すぐ隣で。

「エリオット、先ほどは失礼しました。あなたの疑いは高い確率で晴れました」

　ガラティアが微笑む。その微笑みを信用することはまったくできないが。

「しかし、あなたには悪い知らせがあります。もう、理解されているかもしれませんが……」

　ガラティアは表面上申し訳なさそうにするが、目元が笑っている。楽しんでいるのだろう。今から告げられた言葉で、僕がどういう反応をするか期待しているのだ。

　ライラは、はっきりとわかるくらい気を落としている。ルベリオの反応はわからない。彼との接点はまだ少なく、表情は読めない。……ガラティアを喜ばせるのはまっぴらごめんだ。だが、それはダリアの計算を狂わせることになる。

「あなたは、あなたの使用人に操られていました。いいえ、はっきり言えばあなたはあの娘に騙されて、あなたが主人のような振る舞いをさせられていた、と言うべきでしょうね。……そんな能力もなかったのに」

　そう言うと、楽しそうに顔を近づけてくる。気を抜けば、再び邪眼による催眠を仕掛けてくるかもしれない。目を合わせないよう、伏し目がちになって答える。

「……それは、一体どういう」

　ガラティアはライラに持たせていた帳簿を受け取ると、僕にそれを見せる。……あぁ、やはり。隠してあるはずのもう一つの帳簿だ。詳細は記号でしか書いていないが、様々な裏の収入を記載している……

「この帳簿の筆跡は、あなたのもの？」

「……いいえ、帳簿は長らくダリアに任せていました」

「これは私の推測、間違っていたら教えて。あなたは、付与魔術の才能があった。そして、商売を始めた。帳簿を付けたり、注文や素材の仕入れは、大体あの娘が

仕切っていた……どうかしら？」
「仕入れに関しては、僕が主に行っていましたが、こしばらくはダリアに任せられるようになっていました。帳簿は、その通りです」
ガラティアは満足そうに頷き、ルベリオに目配せをする。ルベリオはつまらなさそうにうむ、と答えると、無表情に僕たちのほうを眺めている。ガラティアはわずかに興奮したように続ける。
「あなたは知らなかったかもしれませんが、帳簿は二つありました。地下水路で、あの娘が落としていったものです」
音からすると、あの場所にミヤビがいたことはほぼ確実だが、それは一切口にしない。僕には知らせる必要もないということだろうか。
「あの娘は、あなたを切り捨てて逃げました。もう、戻ってくることもないでしょう」
「……そんな……」
あぁ、だめだ。演技なんかできるわけがない。ダリアがそう思わせることを狙っていたことがわかってしまうのだ。棒読みもいいところだ、僕はやはり、仮面で顔を隠さない限り役者になんかなれそうにない。
「どうせ、金庫の管理もまかせっきりだったのでしょう？　あなたはただ、言われるままに魔法の道具を作り、納品していた。もちろん、営業もするし、あなたの職人としての腕を疑うものではないけれど……あなたのこの栄光は、このエブラムに拠点を作り出すために、他人にお膳立てされたもの」
口をつぐむ。ガラティアは目を少しだけ大きく開き、少し早口に喋り続ける。
「あの下層あがりの魔法使い娘が生かされていたのも、あなたが魔法使いを助けたのも、ぜーんぶ筋書き通り。あなたの言う通りね、あなたがすごかったわけではなく、他人の思惑に乗せられていただけ」
ライラが怒ったような表情で何か言いたげにしているが、拳を握りしめて黙り込む。
「それでも、ダリアは……」
何を言えばいいだろう。悔しいが、うかつなことを言えない。

「それに、あなた。記憶もいじられているわよ。……あの事件が起きる前のグランドル村の住民の一覧を調べたのだけれど……」

……まて、なぜそんなものがある？

形式上とはいえ、あの鉱山村を治めていたのはエブラム伯であるブレア家だ。ランベルト家の人間であるガラティアが、なぜそんな資料を持っている⁉

「古い資料にはあなたの名前があったけど、事件直前のものにはあなたの名前の記載はない。だから、確かに事件の前にあなたは村から出ていたみたいね。でも……ダリアと言っていたわね、あの女。その名前は事件直前の村の住人に含まれていたわ」

ああ、知っている。

母の死後、僕は村にいながら、村人とは扱われていなかった。

「……どういう、ことですか？」

「ダリアという娘は、あの鉱山村が魔物に襲われたときにあの村にいた。そして、あの事件の生き残りは一人もいない……つまり、死んでいるのよ。あの娘は、ダリアという村娘の名を語った別の何者か……あれこそが、人食いダンジョンに潜む魔物の本体でしょうね」

……残っていた恐怖が、冷たい怒りに置き換えられる。

はっきりとわかった。ガラティア、君はミスを犯した。圧倒的な優位にあぐらをかき、自身の嗜虐的な部分を隠そうとしない。資料を信じるあまり、現地の状況を知ろうともしていない。だから、ダリアに足を掬われたことに気がつかない。

僕も同じミスをしているし、既に生存者のいない鉱山村グランドルの事情を知るのはガラティアには無理だったのだろうが……それを、確証と思い込んだのは僕にとっての大きな幸運だ。それが、傭兵団を使い、村を焼いたのは君たちの命令だということを教えてくれた。

……ああ、ダリア。

君はもしかすると、僕を越えたのかもしれない。

「操られていたことを責める気は、ない」
ルベリオがようやく言葉を発した。
「混血であるというのは、奇妙であることだが、それ自体は悪ではない。むろん、その力で悪事を働いていれば別だが……君は、そうではなかったようだ」
おそらく、混血かどうかも疑っているのだろう。ルベリオの目には感情というものがほぼ見えない。これは、彼に感情がないのではなく、必要なとき以外は感情を面に出さないように訓練ができているということ。同時に、僕にはその真意を読み取ることができないということでもある。
先ほどの、自分の興味に集中したときに見せた元の姿はもう見えない。
ルベリオは僕をまだ交渉相手と見なしている……とは考えにくい。だが、なんとなくだが、殺す気であれば、彼は無駄な会話はしないだろう。
つまり、ダリアの情報なりなんなり、まだ僕から引き出したいことがあるのだ。ならば、対等とはとてもいえないが、まだ交渉の余地はあるだろうか？
「私は、魔物だからといって無意味に殺す必要はないと考えている。もちろん、人に害をなさないことが前提だが」
「……それは、僕に言っているのですか？」
答えは、即座に返ってきた。
「半分はそうだ。もう半分は、君を通じてあの娘に伝わることを期待している」
……もしや、魔物を自分の配下に取り込むことを考えているのか？
「ゴブリンやオークなどの粗暴な魔物や、そこにいるだけで周囲に危害を加える者は人とは共に暮らすことはできない。だが、人の中に紛れ、人として過ごすことができるほど知恵を持つならば、法を守る限り人として扱っても問題はあるまい。……まぁ、教会には言えない話だが」
最後の一言だけは、苦笑いをするような表情になる。
この国の教会は、他国に比べても魔物に対する姿勢は強硬だと聞く。

「僕のことも、黙っていてもらえると考えていいんですか？」
間違いなく、そういう条件の提示をしてきている。お前のことは教会には黙っていてやる、生活も保障する。だから、ダリア……人食いダンジョンの魔物との交渉窓口となれ。ということか。
「俺は、お前の能力を高く買っている。あの魔物とのつながりがある以上、最低限の警戒はしないといかんのだが……正直、ジェンマ商会やブレア家に取られる前にお前を専属にして雇いたいくらいだ」
その言葉を聞いて、ライラが少しだけ安心したような顔になる。どうやら、僕が殺されるのではないかと不安だったのだろう。律儀というか、生真面目な人だ。
「歴戦の冒険者に並ぶわけではないが、俺も立場上それなりに多くの魔法使いと会ったことがある。その多くは弓を撃つ代わりに呪文を唱える者で、残りの多くは魔法の研究をするが実践で役立てることをしない学者だった。お前のような職人であり、なおかつ新しいことに魔法を応用する奴にはなかなかお目にかかれない」
……もしかして、ルベリオは予想以上に僕の腕を買ってくれているのかもしれない。
「なぁ、エリオット。たとえば、広い川を挟んで睨み合っている軍勢がある。弓を撃つ程度はできるが、有効な打撃ではない。馬で川を渡ることはできるが、いい的になるだけだ。お前なら、こんなときに何があればいいと考える？」
これはおそらく、長く続いている領土争いの戦場のことを言っているのだろう。
まさか、戦場で僕の答えを試す気なのだろうか？
「……地形を大きく変えるようなことができるのであれば別ですが、まず無理であれば……方法はいくつか考えられます。もちろん、実現できるかどうかとか、コストは度外視した考えですよ」
考えるのは、嫌いじゃない。それに、時間は必要だ……相手の出方を窺い、助けを待つための時間が。考え込むふりをして、足元に落ちた帽子をゆっくりと拾

い上げ、かぶりなおす。
「そうですね……一つは、氷を使うことです。氷を作り出したり、氷の魔法を使える魔法使いを多くそろえることができるならば、水面を固い氷にすることが可能でしょう」
　夏場には難しいし、慣例として、冬場は普通戦いを挑まないものらしいが。
「それは、魔法使いの数をそろえるのが厳しいな。兵士は多いが、魔法使いの数はやはり少ない。もう少し違う方法はないか？」
「では、上流の、敵陣から見えない位置に大きなため池を作るのはどうでしょうか？」
「ため池？　川の流れでも変えろと言うのか？」
　気の長い話だな、という顔でルベリオが返し、続きを促す。
「現地を知りませんので、タイミングや川の水量にもよりますが……。わずかな時間だけでも、川の水量を大きく減らすことができればいいのならば、変えることはできるのではないかと思います」
「……エリオット、わずかな時間って、それはどういうこと？」
　おそらく、僕よりは実感を持って想定される現場を知っているのだろうライラが遠慮がちに質問を飛ばしてきた。ルベリオは、少し考え込んでから推測を返してくる。
「空のため池を作って、攻め込む直前に水の流れを変えるということか？」
　……こっちの考えを当ててきた。
　しかも、困惑しているライラとは違い、小さく笑っている。
「……ええ、その際にも、小型の堤防を川の中に落として流れをコントロールしたりすることは必要でしょうから、あらかじめ作っておくか、魔法使いに川の一部を凍らせるなどの処理を頼むことは必須になるでしょう。それでも、先ほどの案よりははるかに少ないコストで済むでしょうね」
「川の流れを変えて、ため池に一時的に……となると、水量は減る……あっ」

ライラはこの時点でようやく追いついたようだが、これはライラが悪いわけではない。
おそらく、ルベリオはこの考えを既に持っていたか、ある程度は既に考えていたのだろう。だからこそ、こちらの発案を即座に理解できた……いや、誘導されていた。あるいは、試されていたともいえるだろう。
「ですが、おそらくこれでは川の水量を減らし、攻め込むことができるようになるかもしれない、というだけでしょうね。実際の川底の地形などがわからない限り、確証はありませんよ」
さて、次はどう出てくる？
「川底は、中央で大きくえぐれるように深くなっていて、そこだけは馬や歩兵が通るには不向きだ。平地であれば馬が飛び越すことができるかどうか、という距離だが……川底の石は小さいがとがっているものもあって、なかなか難しい」
即答。
これは、あらかじめ僕に聞こうとしていた問題のはずがない。つまり、頭の中に抱えていた考えの一つをちょうどいいからやらせてみよう、という程度のことだろう。なるほど、アスタルテの言う通りだ。貴族にはやるべきことが多い。
「大きな段差は、幅が短いのであれば小型の橋を造ってしまうのがいいのではないでしょうかね。重装甲の騎士が通るものは簡単ではありませんが、歩兵が走り抜ける程度の強度であれば、数名で持ち運べる物が作れるでしょう。これは、うちに任せていただければ多少軽くしたり、頑丈にしたりすることは可能です」
「できれば、騎士を先に突入させたいが……まぁ、兵士の損耗は仕方ないか」
「川底の石が気になるのであれば、使い捨てでいいので、木材を張り合わせて巻物状にした長い絨毯でも作ればいいんですよ。あるいは、兵士全員に丈夫な鉄靴を配布するのもいいでしょう。靴の底に頑丈な素材を縛り付けるだけでも、それなりに効果はあるでしょうし」
「……鉄靴の営業をしてくるかと思ったが、本当に欲

がないな」
　あきれたような顔をしているが、ここで商売っ気を出してどうするというんだ。
「僕の立場は今非常に弱いんですから、ここで欲をかいても意味がありませんよ」
　その言葉を聞くと、ルベリオは小さく頷いた。
「あぁ、それを自覚しているのはいいことだ。それを忘れない限り、君の安全は保証しよう」
　その言葉に、僕よりもライラがほっとした表情を見せる。ガラティアは会話に興味はないらしく、僕が目線を合わせようとしなくなったのを理解すると、僕の手元や足先を注視しているようだ。
　……おそらくは、僕がどこかにサインを送るか、何らかの怪しい素振りをしないか見ているのだろう。まだ、こいつは僕にたいして警戒を解いていない。
「さて。長居してしまったな」
　椅子から立ち上がると、ルベリオは改めて周囲を見渡す。
「エリオット、この店に魔法の剣はあるか？」
　店の倉庫から、いくつか持ってくる。通常よりも軽い物、斬りつけたときに強い衝撃を与える物、実際よりも短く見えるために避けにくい物。最も売れるのは、軽い物だ。
「……これだな。これを買おう」
　ルベリオが選んだのは、かつてライラがためつすがめつしていたものの、領地からの収入を持たない契約騎士の懐では手が出せなかったあの剣。
　値段を告げると、懐から財布を取り出し、なかなか見ることのない大金貨を何枚も取り出す。まさか、即金とは……。
「……ライラ」
「はっ、ご命令を」
　ルベリオに名前を呼ばれて、ライラが驚いて襟を正す。
「お前には今までにも苦労をかけているが、お前の忠義は疑いようのないものだ。私が家督を継いだ際には、いずれお前にも領地を戻すことになるだろう」

ライラは一瞬何を言われたのかわからない、という表情になったが、即座に自分を取り戻した。
「こ、この身には過分なお言葉です……」
「この剣は、お前に与える」
ずい、と。今購入したばかりの剣を差し出す。戸惑いつつも、ライラは剣を受け取る。
「これは、今までの忠義への褒美であり、今から与える使命への詫びだと思え。今からお前の騎士としての勤めをしばらく解く。騎士ライラ、お前はしばらくの間この店に住み込み、エリオットの身辺警護を行え」
は？
「えっ？」
僕以上に、ライラが豆鉄砲を食らったような顔になる。
「え、え、エリオットの店に？　住み込みで？　いや、でも、私の家は近くに……」
ガラティアがあきれたようにライラに言葉をかける。どうやら、僕の意志は気にしないことにしたらしい。
「未通女(おぼこ)でもないでしょうに、今更恥ずかしがる必要はありません。この男は、証拠隠滅のためにあの魔物娘に殺される危険性があるのです。そのためにあなたが護衛に付け、と我が主は言っているのですよ？」
からんからん、と軽い音がして扉が開く。
「エリオット、ちょっと注文を……って、あら？」
店に入ってきたのは、青い髪の娘。長い髪が揺れている。腰の所と、肩に掛けた小さな鞄は見覚えのない物だが……
「……あら、最近ブレア家に雇われた魔術師殿」
ガラティアが少し棘のある、それでいて礼儀を失さない程度の挨拶をした相手はサラだ。
「あなた、確かランベルト家の……え、もしや」
露骨に慌てたように、ルベリオを見るサラ。
「いや、気にする必要はない。偶然よっただけで、公務ではない」
「ランベルト家のルベリオ殿でしたか……これは失礼をいたしました」
「いや、こちらの用事は済んだ。これ以上は商売の邪

魔だろう。ガラティア、準備を」
軽く言葉を交わすと、ルベリオはサラに対してはあまり関わらず上着を羽織りなおす。
「や、やぁ、サラ。今日は、なんの注文だい？」
もちろん、注文などない。サラの所に届ける品は大体決まっていて、定期的に届けている。来るのが遅かったが、サラは僕の危機を知って駆けつけてくれたのだ。
「あぁ、ちょっと触媒が足りなくなってね。今度のオリヴィア様のパレードの護衛に当たって、触媒が足りなくて呪文が使えないなんてなったら恥ずかしいじゃない」
そう言うと、サラは鞄と小袋を持ち上げて、軽く振ってみせる。
「あれ、ダリアさんは？」
「あー、その……」
僕だけではなく、ライラまでが困った顔になる。
……僕は演技で、ライラは本気でという違いはあるが。
扉が開き、ルベリオとガラティアが出ていく。からんからん、と軽い音がする。

※　※

「ルベリオ様、あのエリオットという男はどうなさるおつもりですか？」
ガラティアは小さな声で問いかける。
「影たちからの報告はどうだった？」
主は答えずに、別の問いかけを行うが、ガラティアは嫌な顔一つせずに答える。
「暗殺ギルドのあの娘が近くまで来ていたようですけど……ダリアといいましたっけ、あの娘が離れると同時に引いていきました。また……あの水路にいたラミア、暗殺ギルドにいたもう一人の魔物でしょう。暗殺ギルドが完全にあいつらに乗っ取られたのは確実ですね」
「あらかじめ、居場所をつかめればいいが。あの水路から追うことは可能か？」
「……厳しいですね。情報を握っていたのは暗殺ギルドなので、今までに調べさせた部分だけではおそらく情報量で負けるでしょう。影たちも、相手の庭の中では力を発揮しきれませんから」

「そうか」
　特に悔しがる様子もなく、男は答える。
「エリオットは、おもしろい奴だ。切り離して使えるのであれば、いい働きをするだろう。だが、あれは利益を求める目ではないな……」
「そのようなもの……なのですか」
「あるいは、あいつを通じて鉱山村の魔物と取引ができるようになればよし。が……不確定要素になるのであれば、消す」
　ガラティアは満足そうに頷き、言葉を返す。
「手を取り合うことができるのは、喜ばしいことです。見張りはお任せください。ライラもあの男のことを憎からず思っているようですし……ふふ」
「……ライラが？　そうだったのか？」
　少し間を置いて、疑問の言葉が出た。
「我が主、あなたはそういうところは本当に興味がないのですね……。おそらく、ライラはあの娘に遠慮して、どこかで嫉妬していたのでしょう。自分と違う、小さな幸せを見つけていたあの娘に……ふふ」
　楽しげに笑うガラティアに、あまり興味なさそうに歩きながらルベリオは小さく問いかける。
「ふむ。そういうものか。……で、今夜試すのか？」
「ええ、これならば、万が一失敗しても影響はありませんからね。それに……偶然ではありますが、いい情報が手に入りました」
「……オリヴィアのところの魔法使いか」
「触媒が必要な魔法使いなど、未熟もいいところですが……手の内をさらすのは、賢いことではありませんね」

※　※

「え、ダリアいないの？　で、その人は？」
「あー、その。私は……」
　サラの当たり前だが容赦ない質問に、ライラはひたすら困っている。サラにはライラのことは教えてあるし、状況から大まかに察しているだろう。それでも、何も聞かないのはかえって怪しい。
「ライラさんは、さっきいたランベルト家の若様のお付きの騎士さんだよ。色々事情があって、しばらく僕

の護衛をしてくれることになったんだ。ダリアはしばらく安全な所に……」
　怪訝な顔をするも、引き下がるサラ。助かったというような顔で露骨に安心するライラ。
　この人は、本当に嘘がつけないんだな……まぁ、騎士としての腕は一流だし、だからこそ僕の護衛兼見張りとして置いていったのだろうけれど。
「ふぅん……別にいいけど、やばいことに首突っ込んでいなくなる、とかしないでよね。この店なくなると困るんだから」
「……確か、サーリア殿といったか。その、オリヴィア様お付きの宮廷魔術師と聞いていたが……」
　戸惑ったようなライラの声に、サラはあっけらかんと答える。
「あ、知られてるのね。よろしく、ライラさん。知ってるかもしれないけど、あたしはもともと冒険者だから。育ちはあまりよくないのよ」
　あー……と、ライラが少しだけ安心したような顔になる。そりゃ、ガラティアと比べれば、サラは接しやすい相手だろう。
「それは、正直助かる。私も礼儀はそこまで得意なほうではなくて。商売の邪魔をする気はないから、私のことは気にせずに進めてほしい」
「いや、それかえって気になるんだけど……」
　苦笑しつつ、サラは鞄を開けて小さな書き付けを僕に渡す。
「触媒のリスト、これだけそろえてもらえる？　分量は、この鞄と小袋に入る程度でいいから」
　内容がライラの目に触れないように、奥に行きながら書き付けをチェックする。これは、オリヴィーの筆跡だな……
　内容は簡単で、「サラに話を合わせて、適当な触媒を詰めてほしい」というものだった。何を考えているのかまではわからないが、オリヴィーとサラは独自に動いてくれていた。それだけでも心強い。
　サラは精霊を使う魔術師で、短杖を使うだけで、実際のところ魔法の行使にはあまり触媒を使わない。あえて触媒を買いに来たと言ったのは、この店に来る言

い訳以外にも何か目的が……あぁ、そういうことか。
適当な触媒を詰めて店に戻ると、サラがライラを質問責めにしているところだった。
僕が戻ったのを見ると、サラは突然こっちにやってきて
「ねぇ、あの人と同居ってどういうことよ⁉」
と詰め寄ってきた。……あ、半分本気で怒ってる？
「いや、まぁ護衛だから……」
「あの子がいたからまだ……っ」
それだけ言うと、サラは言葉に詰まったようにいったん止まる。本気と演技の中間のような顔で、鞄をひったくるように受け取ると
「支払いは、いつものようにまとめて支払いにくるわ」
と言って、店を出ていく。入れ違いに、ジェンマ商会の使いが荷物と手紙を運んでくる。
しばらく事務仕事をしていたが、ダリアがいないために手間取った。……ダリアの不在は、地味にこういうところでも効いていていた。

※　※

「エリオット、君は……その。女性に人気があるんだな」
作業が一段落したところで、ライラが何とも言えない困ったような顔でつぶやく。サラは一体ライラに何を吹き込んだんだ？
「サーリア殿から、なんの権利があってここに寝泊まりするのかと、結構な剣幕で問いただされてしまった……。なんというか、その……彼女は、君のことを男性として好いているのでは……」
あー……
「いや、そんなことを言われても……」
「あっ、そ、そうだな。あんなことがあったばかりだというのに、失礼なことを言ってしまった。すまない、謝罪する」
ライラが本気で頭を下げる。
サラとしては「僕を狙っていたけどダリアがいたから遠慮していた」という立場に見せたかったということか。おそらく、この脚本を書いたのはオリヴィアだろう。

狙っていた男と「つながろうとしていたけれど、まだつながれていない横恋慕した女」という姿を印象付け、可能な限り接触が少ないと見せて、魔物とのつながりを疑われる要素は薄くしておく狙いなのだろう。ルベリオとガラティアにうまく見せることはできなかったが、僕も同じ立場ならそうする。

「いや、僕にもよくわからないんだ。だから、ライラさんが謝るようなことじゃないよ」

偉い人にも知り合いができたしね、と力なく笑う。ランベルト家は間違いなく大口の顧客になるが、まぁあの状況で喜べるようなものでもない。

「それにしても、君は本当にすごいんだな。我が主……ルベリオ様があのように熱心に話し込むなんてめったにない」

「いや、恐ろしい人だったよ。下手なことを答えたら斬られるんじゃないかと冷や冷やしてた」

その言葉で、ようやくライラの顔にわずかながら微笑みが戻る。……ライラは、普段は生真面目に口を結んでいるか、少し寂しそうにしている印象が強いが、笑うと少しだけ幼く見える。

「まぁ、そう言わないで。あのお方はとても才能のある方なのだが……自分と対等に語りあえる友に飢えておられるのだ」

きれい、ではなく、可愛いなとそのとき初めて感じた。

「だから、もし君があのお方の友達になってもらえたら、私も嬉しい……あぁ、すまない。こちらの要求ばかりだな。……何か雑用があれば、命じてほしいな。専門的なことはともかく、力仕事とか日常の世話なら多少はできるから」

確かに、黙って立って見張っているだけだと、ライラ本人が申し訳なさの固まりになりそうだ。ならば、台所のあれこれを教えて、少し賄いでもしてもらおうか……れっきとした騎士のライラにそんなことをさせていいものか、少し悩むけれど。

「じゃ、お茶の場所を教えるから……」

立ち上がった拍子に、まだ開けていなかったジェンマ商会からの手紙が落ちる。

「あぁ、しまった。中身を確認していなかった」
さすがに、急ぎの用ではないと思うけれど。
内容は、明日の昼食の誘いだった。しかも、気が向けば来てくれという不思議なもの。返答を出すことさえ求められていない。さて、あの爺さんは何を狙っているのだろうか。

※　※

「いや、家主である君がベッドに寝てくれないと。私は野営の経験も多いから、床でかまわない！」
「そんなことを言われても……女性を床で寝かせるのはさすがに気が引けるんだけど」
トラブルが持ち上がったのは、その日の夜だ。
窓の鎧戸を落とし、小さな魔法の燭台に灯りをつけて部屋の明るさを保つ。感心していたライラが寝室を確認して、動きがピタリと止まった。そういえば、この家は大型のベッドが一つしかない。そこで、先ほどの会話となったのだ。
今まではダリアと一緒に寝ることがほとんどだった。ダリアは僕の魔物であり、僕が抱く相手だったから、こういう気遣いは必要なかった。
場合によってはシロやサラ、アスタルテも加わることがあったから、ベッドサイズとしては大きいが……ライラと同衾するのはさすがに気が引ける。しばらく真顔で話し合いをした結果、ベッドには僕が寝ることにし、毛布や枕など、寝具類の主な物は床で寝ることになったライラが使うということで両者合意を得た。
どこで寝るかを真剣に話し合うなんて、あまりの馬鹿馬鹿しさにどちらからともなく吹き出してしまい、しばらく笑い合った。
「……あぁ、ようやく笑ってくれたね、エリオット」
「ずっとふさぎ込んでばかりもいられないからね。何せ、明日はあのジェンマ爺さんのところに呼ばれているわけだし……あ、ライラさん、寝間着」
「あ、いや、寝床を借りる身だ、その程度は……」
そんなことを言われても、軽装鎧の鎧下は多少の防具としての性能を持たせてある衣服であり、簡単に言うとごわごわしていて着心地のよいものではない。鉱山村で傭兵相手に商売をしていたとき、武具の修理を

させてもらうときに何度も着たことがあって、その着心地の悪さはある程度知っている……少なくとも、寝間着にしたいとは思わない。

客用の寝間着はないのでダリアの使っていた寝間着を渡すと、ライラは何とも言えぬ顔で考え込んでから上着を一気に脱いだ。

「では、ありがたく……ん？」

女性の裸に慣れすぎて、羞恥心に関する感覚が鈍ってきていたのは事実だ。

だが、ただぼーっと見ていた僕が悪かったのだろうか。それとも、ライラの不注意を責めるべきだろうか。

衣服の下から、ライラのちょっと固そうだけれども形のよい胸が露わになる。白布で巻き付けてあったのだろうが、それも丸ごと脱げ落ちてしまっている。

何がとはいわないが、普段外から見ている予測よりも大きかった。

……もしや、サラが警戒したのはこれだったのだろうか？

「あっ⁉」

「あ……あ、ライラさんごめん！」

急いで目をそらすものの、真っ赤になったライラが急いで胸を隠すのが見えた。

「いや、その……今のは私の不注意が招いた結果だ……その、すまない。あ、ただ……これからしばらく、敬称をつけるのも面倒だろうし。今は客ではないし、居候のようなものなんだから、単にライラと呼べばいいから」

ライラはそうつぶやくと、照れたようにお休みと言い、毛布をかぶってしまった。ライラの言葉自体も、普段のかしこまった口調と時々漏れる砕けた口調が混じってきている。やはり、普段は気を張っているのだろうか？

「ええと……お休み、ライラ」

そう言うと、灯りの強さを足元が見える程度に弱くして眠りにつく……と、いうのは嘘だ。眠った状態からでも、意識を集中することはできる。そして、この状態ならば、僕が魔物にした女たちの精神に移ることができる。

ヌビアを追跡していたときのガラティアの動き方から考えて、わざわざ使い魔に「目」の魔具を持たせていたことを考えれば可能性は低い。だが、僕がディアナを通じてガラティアを見たように、ライラの目を通じて僕の身動きはガラティアに見られていないとは限らない。

だからこの時間だけが、味方との連絡が取れる時間なのだ。

※　※

まずは、ダリアが心配だ。

いるとしたら、ネムとヌビアが隠れ住んでいるエリアだろう。ネムの中に乗り移る……起きてはいるようだ。

「あれっ、あたしの中にエリオットがいるよ？」

自分の頭の中で声がするようだが、これは逆。僕がネムの中に入り込んでいるために、ネムの声が聞こえるのだ。

「マスター、ご無事ですか？」

「我が君、大丈夫なのじゃ？」

ゆっくりと意識の波長を合わせ、ネムの視界を借りる。視界の端で灯りがともる、ヌビアがランタンを持ってくるのが見える。僕は夜目が利かないから、それを気遣ってくれたのだろう。よし、声でわかってはいたけれど、ダリアもミヤビもいる。

「すまないね、見張りがついているから、こういう形でしか連絡ができなかったんだ」

ネムの声で喋っているから、違和感があるなぁ……まぁ、そんな細かいことは気にしていられないけれど。

事情を簡単に説明し、しばらくは地下水路とアスタルテのいる蜘蛛の巣館のどちらかで過ごすように伝える。

「シロさんとディアナさんから、連絡がきています。あのとき、店の外には少なくとも二人いたとのことです」

僕の頭をつかんだ「三号」と呼ばれるあいつの他にも、もう一人いたのか。用意周到というか……ガラティアの暗殺者は一体何人いるのだろう。

「深追いはしていないと思うけど……何かわかったこ

とは？」
「盗賊的な身の動きをする細身の男が一人、北方人らしき、肌の白い女が一人だったそうです。それぞれ別個に移動したため、大まかに旧市街に向かったこと以外は……」
　まぁ、深追いはしなかったのだろうし、それは正解だ。二人で二人を追跡するのは、よほど実力差がない限りは無理だ。これからしばらくは、ルベリオが僕を殺そうとしない限り逆に僕の命は安全と言えるだろう。だからこそ、地下水路のメンバーの防衛と機密保持を心がけなければいけない。
　情報漏洩が一番ありえるのは、正直に言えば僕と僕の店からだ。「僕が知らない安全な逃げ場」を準備することを指示し、何も連絡がつかなければシロを経由してサラかアスタルテに指示を仰ぐように伝える。
　アスタルテが仕切っている「神殿」は順調に巣を広げているようだが、まだ影響下にある人の数は少ない。目標となる相手につながるにはもう少し時間がかかるだろう。
　ガラティアもルベリオも知らない、僕たちの唯一の秘密は、自分の意志で考え、行動する頭が複数あることだ。
　オリヴィアが、アスタルテが、それぞれ独自に動くことができる……今では、ダリアも。
「残り時間は少ないけど、まだこの先はわからない。油断はしないでほしいけど、今張りつめる必要はないからね。あと、ダリア」
　名前を呼ばれて、ダリアがぴくんとはじかれたように反応する。
「はい、マスター」
「今回は、君のおかげで助かった。ありがとう……ダリアもやるようになったじゃないか」
「いえ、勝手なことをしてしまい申し訳ありません……」
　恐縮するダリアの頭を、ネムの手を借りて軽くなでる。
「何かあったら、自分の考えで行動するんだ。僕は、緊急の事態においては君にそれを命じる。いいね？」

それは、相変わらずの確認作業。
僕が命じる。ダリアがそれを受ける。彼女は僕の物であるということを、再確認するだけの他愛ない儀式。
「……はい、マスター」

※　※

サラも、僕が訪れるのを待っていてくれた。
しかも、オリヴィアとの連絡の準備まで整えて。
「やぁ、オリヴィー。今回はしてやられた」
「話を聞いて、呼吸が止まるかと思ったわよ。まさか、こんなに早くあなたのところにたどり着くとは思わなかったけど……いずれ遠からず知られていたでしょうね」
「君のほうも、対処がずいぶん早かったじゃないか」
「ちょうど、サラと一緒にいたのよ。周囲があまり信用できないからサラと過ごすことが増えるんだけど、おかげでサラってば私の愛人扱いされてるのよ？」
……いや、そんなことを言われても困る。
「僕は妬けばいいのかい？」
「むしろ、私とサラが妬く立場だと思うな。騎士ライラと同じ屋根の下ですものね」
「彼女はいい人だと思うけど……何せ、後ろにいる相手が、ね」
明日以降届くだろうライラの荷物にはガラティアの「目」が仕込まれている可能性もある。前に僕が見破った以上、別の手法を取ると思うが……
しばらく相談を続けていると、なんだか妙な感覚が流れ込んできた。
……？
これは、サラの感覚ではない。サラは身体の主導権を僕に預けてくれているし、そのサラ本人も僕の身体から何か感じているようだ。
（ねえ、エリオット。あなたの身体のほうからなんだか、妙な……）
その瞬間、集中がとぎれてしまう。甘く小さい痛みが走り、サラとの波長がずれた。
具体的には、サラには本来感じることのできない感覚が流れ込んできたのだ。……男性器への、性的な刺激が。

「……ん……？」
身体に意識を戻し、状態を確認する。
寝間着がはだけられ、胸を出した状態でベッドの上に仰向けに寝ている。あの感覚は、ここからではない……その瞬間、すべてを理解する。温かい粘膜に肉槍が呑み込まれる感触。
「っ⁉」
ズボンも半ば脱がされており、局部が露出している。弱い光に照らされて、ベッドの上に覆いかぶさる女性の裸身が見えた。
暗闇の中に、濡れたように光る瞳が見える。予想通りではある。この部屋にいるのは僕以外に一人だからだ。予想外でもある。彼女がこういう行動をするとは思っていなかったからだ。僕の股間に覆いかぶさるようにして、僕についばむような口づけをしていたのは……ライラだ。
「ライラ……何を？」
敬称をつけるのも忘れていた。ベッドの上に覆いかぶさるように僕の股間に顔を埋めるのは、あの生真面目な騎士ライラ。
それくらい、予想外だったのだが……
「すてき……ずっと、こうなりたかった……」
身体の興奮とは別に、精神は一部分が急激に醒めていく。
欲情したライラの表情は確かに今まで見ていた真面目な姿とのギャップが大きいが……これは、彼女の本意ではないだろう。彼女の目は、どこか遠くを見ているように見えた。
「お願い……わたしを、抱いてほしい……」
魅了（チャーム）、幻惑（メズマライズ）、言い方はいくつかあるが、ライラは誰かに操られている。まず間違いなく、あの邪眼に。
はねのけるべきかとも思ったが、脳裏に残る警戒がそれを押しとどめた。
「え……まって、ちょっと……」
おろおろと、周囲を見渡す。正しくは、おろおろとしているような振りをして周囲とライラを観察する、

だ。
ガラティアの魔術は、おそらくは生き物の視界は操れない。それは、ヌビアを追っていたときにガラティアの使い魔が「目」となる魔具を持っていたことからの予想だ。だが、確定ではない。
僕が魔物にした相手に乗り移るように、ガラティアが今ライラの身体に入り込んでいる可能性は？
「だめ……なの……？　もう、抱いて、くれないの……？」
その声は、本気で寂しそうで、不安そうで。どこまでが演技なのか、ライラの意志がどこまで残っているのかはわからない。残念ながら、僕にはそういうことができないからだ。
警戒しつつ、ライラと目を合わせる。
弱い灯りに照らされて見る彼女の瞳は、明らかにここではないどこかを見ていたが……どこか弱気だった。
「……私は……私は、ずっと見ていたんだ……。あんなに、近くにいた……」
……あんなに、近くに？
様子がおかしい。演技させるなら、こんなつじつまの合わない言葉を言わせるはずがない。
つまり、今のライラはガラティアが直接操っているわけではないのだろう。
催眠をかけるなり、邪眼で操るなりして、一定時間が経ったり特定の条件下になれば動きだすように仕掛けられた暗示。
それがなんだったのかはわからないが、何を言わせるかなどの厳密な操作はできないのだろう。おそらくは僕に抱かれることを狙って発情させ、夜這いをかけるように指示をしたのだろうこれは、僕を抱き込みにかかったと考えていいのかもしれない。
だが、ガラティアの意図とは別のことが起きている。
「ライラ……いつから、見ていたの？」
声をかけるのは、ちょっとためらわれた。
この部屋に、魔力が込められた品は自分が作り出した物しかない。だから、僕が関知できない暗殺者が忍び込んででもいない限り、この会話が盗み聞きされている可能性は限りなく低い。それでも、ガラティアの

手がどこにあるかわからない以上、警戒してしまう。
「小さいころから……とうさまが、生きていたころから……はじめてあなたにお会いしたときから、ずっと……」
別の意味で、腹の底が冷える感覚がした。
ここから先は、聞いてはいけないのではないか。
ライラは身を乗り出し、僕の腹に、胸板に、騎士が貴婦人の手の甲に口づけをするように唇を触れさせる。
「身分違いだなんて、最初からわかってる……それでも、あなたの……あなたの近くで、あなたの剣として、盾として……あるいは、端女（はしため）としてでも……あなたの目指す先を、一緒に見ていたい……」
おそるおそる、おびえるように、ライラの舌が身体の表面を這う。
娼婦たちのように、舌と手や指を同時に扱うような技術は持っていないが、懸命に奉仕を続ける。
どうしようか迷い、手を伸ばしてライラの髪の毛に触れる。かすかに震えていた。……さらに手を伸ばし、軽くライラの頭をなでる。
僕が拒絶しないことに少しだけ安心したのか、舌の動きがちょっとだけ活発になる。息継ぎをするように、時折こちらを上目遣いに見上げてくる。
これは、愛の告白だ。
それが実際に行われたものなのか、果たせなかったものなのか、僕にはわからない。
だけど、その告白の相手は明らかに僕ではないし、ここで僕が聞いていいようなものでもないはずだ。
ガラティアも、これを僕に聞かせて得があるわけでもない。あの女の酷薄な部分は多くあるが、これを喜ぶとは思えないし、狙っているとも思えない。やはりこれは意図せず起きたものと判断すべきだ。
考える。自分がガラティアだったら、どうやってこの状況を作り出す。自分が誰かを操ろうと思うときに、どうやって搦め捕る？
……ネムとヌビアを魔物にしたときに、自分は何をした？

そう、相手を思う心を利用した。ああ、そうだ。自分も大差ないことをしている。ガラティアは僕がライラに惚れているなんてことは考えていないだろう。では、ライラが……ああ、そうか。ガラティアはミスを犯したのか。

「罪人の娘となり、家も、身分も失ったわたしを、貴方はそばに置いてくれた。わたしは頭がよくないから、貴方の見ている未来はわからないけれど……」

ライラが僕に好意的だったのは、僕に惚れていたからではない。

自惚れて、少しくらいはそう思ってくれていたと仮定しても、彼女が最も強く想っていたのは、僕ではないのだ。彼女は公平で正義感が強く、親切で、ちょっとお人好しで、この街に来たばかりの僕とダリアに優しく接してくれていた。ただ、それだけなのだろう。

……そして、彼女が本当に愛していた相手はたった一人。

ガラティアにそれが理解できなかったのも、仕方がないことなのかもしれない。

僕だって、ダリアの想いに気がつくことができなかった。騎士であるライラは自分の中で、その想いを忠誠心に置き換えてずっと隠そうとしていた……罪人の娘である自分にはその資格もないと、自らを騙そうとしていたのかもしれない。

……なんだか、オリヴィアに無性に会いたくなった。さっきサラを通じて話をしたばかりだし、今そんなことはできるはずもないのに。

「道具でもいい。愛してくれなくてもかまわない……子供のときから、おそばに置いていただいたあの日から、貴方のことが……」

ライラとダリアが、なんとなく仲がいいように思えたのは、このためか。

「好きだ……。貴方の隣に立つことなんてできないけれど。せめて、貴方のために……貴方の剣として、生きたい……」

弱い光が、僕の上で身体を持ち上げたライラの裸身を照らす。

均整の取れた、やや女性としては筋肉質ながらも柔らかい曲線を描く身体。腰に接しているライラの茂みは、明らかに発情して、熱をこもらせているのに……

彼女は、泣いていた。

ルベリオ・ランベルト。君は、この女のことをどこまで知っているのだろうか。

オリヴィアの命を狙い、そして今僕の生殺与奪権を握ろうとしつつある敵に対して、僕は奇妙な共感を覚えていた。

そして、彼はこのライラの言葉を聞いたことがないのだろうと考え、少しいらついた。ライラはここにいて僕と抱き合っているけれど、彼女の心はここにいない。ルベリオはライラの心を奪っていることにすら気づかず、野心のために邁進しているのだろうか。

なんだか、無性に腹が立った。

なぜ、あいつなんだ。なぜ、ルベリオにここまで一途なんだ。

自分がルベリオに嫉妬していると自覚したのは、実際のところ後になってからだ。ライラの心は、僕の物にはできないだろう。それでも、彼女をこのままにしておきたくはなかった。奪って、僕の物にしてやりたかった。

これは罠だ。

ライラは、意志を持ったまま操られる人形。後ろで糸を引いている人形遣いはガラティア。

ガラティアにその気があれば、僕はライラに殺されていた。つまり、ライラは生きた罠であり、ガラティアには同じようにどんな相手にも罠を仕掛ける力があるということであり……ライラにも、まだ何か仕掛けられている可能性は高い。

だが、ガラティアの仕掛けは完璧ではない。

ライラの心を制御しきれていないのもその一つで、おそらくは彼女の能力も万能ではない……はずだ。

遠征軍にいたオリヴィアの暗殺に自分の力ではなく、暗殺ギルドを利用したのがその一つの証拠。距離か、時間か、数か、精度か、人間である以上どこかに限界

はある。
精神に干渉し相手を操るガラティアの邪眼と、僕にできる人の身体への魔力付与は違うものだし、それが干渉し合う可能性もある。
罠だとわかっていても、乗るしかない。ガラティアに、ルベリオに気づかれないように。ライラ本人にすらわからないように……僕は、ライラを僕の物にする。
「ライラ……今から、君を奪う」
腕を引き寄せ、ライラの身体を引き寄せる。
彼女は逆らわず、受け入れられた喜びを表す。ライラの瞳は、僕を見ていない。僕は、ライラの背後にいる敵の動きを見ている。
「……ごめんね」
あぁ、そうだ。僕は魔物だ。
生き残るために、君を貪り食らおう。……だから、僕の物になれ。
「ライラ、見せて」
それだけで、ライラはいそいそとベッドの上で身体をひっくり返す。
筋肉はそれなりにあるはずなのに、不思議と柔らかい曲線を保ったライラの脚が目の前を横切る。ちょっと大きめのお尻が、目の前に突き出される。
「あの……お見苦しいものですけど……ご覧ください……」
既に準備は出来上がっている。操られているからとはいえ、もともと色事の経験が多いのだろうか……ああ、そういえば、ライラはルベリオの情婦のように言われていることもあった。そう考えれば、おかしくはないのだが……ライラの告白とは少しちぐはぐだ。
少し考え込んでいると、ライラがそれを僕が不満を持ったと受け取ったのか、指を股間にあてがい、ゆっくりと自分で開いた。
「こちらが……私の、いやらしい……その、穴……に、なります」
明らかに、処女ではなかった。おそらく尻の穴も使い込まれているだろう。……ああ、そういうことか。
「ライラ、夜はどんな仕事をしてくれるんだっけ。も

第八章　ダンス・マカブル

神官の衣装に姿を変えたアスタルテは、エブラムの町中を歩き続けていた。ときに立ち止まり町の人と言葉をかわす。再び歩きだし、顔見知りらしき男たちと合流し、歩きながら二言三言話をしてはまた歩きだす。

この日、アスタルテは朝から延々とこうしていた。

オリヴィアの口利きで、非公式ではあるが神殿の客員としての立場は得ているから、特に困ることもない。貧民街での炊き出しにも参加する彼女は貧困層の人間にも少しずつ顔を知られだしているため、彼女に声をかける者がいても特におかしなことはないし……衣装で押さえているとはいえ、ただでさえ肉感的な魅力を持った身体のラインは隠し通せるものではない。それが年若い男たちならばなおさらだろう。

……ただ、もし誰かがその会話内容をずっと追い続けていたならば、奇妙なことに気がついたかもしれない。

「やぁ、神官様。いい天気だね……例の馬車はまだ発見できていないみたいだ。新市街にはいなかった」

「あら、ご無沙汰しています。では、旧市街ですね。おそらくはパレードからそこまで遠くない場所にいると思いますから」

「ああ、わかったよ。ではまた」

こんな会話を、何十回、何百回と繰り返している。会話の相手は毎回変わり、同じ相手と話すのはそこまで多くない。

こういった会話を交わすのは、すべて間違いなく青年から中年の男性。貧民ではない程度の下流から中流程度。職業も明らかにバラバラ。

それが全員、「神殿」の客人たち……エリオットによって一部分を魔物にされた人間だと理解しているのは、当のアスタルテ以外誰一人いない。

この日何百回目かの会話を終えたあとに、アスタル

テのところに新しい客人が訪れる。二人組の少年は無邪気に声をかけてくる。
「アスタルテさん、お疲れ様です」
「チャナから、頼まれていたものを持ってきたぜ」
　お祭りの日だからか、多少めかしこんだハリーとフレッドが差し出したのは小さなバスケット。そこには、カモフラージュのための小さな酒瓶と、目的の薬瓶が入っている。
「あら、ありがとうハリー、フレッド。今日はお店にはいかなくていいの？」
「まさか、これから入るんだよ」
「稼ぎ時はパレードが終わったあとなんだって。だから、お使いが終わったらすぐ準備に向かわないとね。あ、あと、それは飲ませてもいいし肌に塗ってもいいって。ただ、肌からだと時間かかるって言ってた」
「ありがとう、二人とも。頑張って稼いでらっしゃい」
　何か言いたそうにしているハリーを、フレッドが引っ張っていく。ここで何か言葉を漏らして聞かれてしまえばかえってまずいというのは、二人も理解しているのだ。お互いに、軽く手を振って別れる。
　少し行くうちに、また一人の男がやってくる。腰に下げた袋から少し飛び出した手帳と鉛筆は、彼が商売人だろうことを示している。
「やぁ、お探しの物が見つかりましたよ」
「あら、本当ですか？」
「ええ、間違いありません。言われていた通り、どこの家紋も入っていない小型馬車です。人通りの少ない裏通りを移動しています」
「……やはり、こまめに場所を変えていましたか。今の場所は把握できていますね？」
「もちろん」
　天気の話をするように、商売の話をするように、アスタルテは「神殿」の洗礼を受けた男と会話を続ける。
「ならば、始めましょう。ちょうど、荷物も届きました……『みんな』を集めてください。あとは、手筈通りに」

「ええ、わかりました」
意気込んで、男は小走りに駆け去っていく。彼は自分でも気づかないうちに、自分でも知らない同類たちを呼び集め、目的地に向かっていく。
自分がなんのためにこんな骨折りをしているのか、彼らは明確にはわかっていない。命を捨てさせることまではできないだろうが、強制すればかなりの無理もさせることができる。
それは、紛れもなくガラティアが使うものと同じ類の手段。それを知りつつも、エリオットは彼らを使っていた。
ペンダントに付けた貝殻型の魔具を軽く握り、報告を入れる。
「……エリオット様。ランベルト家の執事を発見しました」

※　※

「おおい、大変だぁ」
御者は声をかけてきた男に目を向ける。商売人だろうか、腰に下げた袋から手帳と鉛筆が飛び出している。見覚えはないが、どこにでもいるような男。急いで走ってきたのか少し息切れしている。ただそれだけだ。
どうでもいいような相手だが、もし絡んでくるようなら、自分か後ろに控えている護衛たちが追い散らさなければいけない。主は馬車の中で大事な何かをしているのだから。
彼らは正式な騎士や護衛などではなく、ただの元傭兵や冒険者崩れだ。たいていは何らかの罪を犯したことがあり、ランベルト家の執事であるガラティアの個人的な配下として忠誠を誓い、彼女の個人的な任務をこなすことでそれらを見逃されている。ランベルト家の権力の庇護下にあれば、多少の犯罪や暴力沙汰はなかったことにできる。
その甘い蜜の味を知れば、たとえガラティアがどのような命令を出そうともよほどのことがなければ疑う気もなくなるだろう。そうやって与えられる権利は彼らの忠誠心をつなぎとめるには十分であり、彼らは何年もそうやってガラティアとランベルト家のために暴

力を振るってきた。
後方の見張りをしていた力自慢の護衛に目線で合図をして、御者は男に向き直る。念のため程度とはいえ、警戒は怠らない。ガラティアが襲われることはめったにないが、皆無というわけではないからだ。
「貴様、何用だ。この馬車をどなたの馬車だと思っている？」
普段は人気のない裏通りとはいえ、パレードからあふれた人々が流れ込んでくるのか、多少の人通りはある。ちょうど、馬車の脇を酔った男たちの集団が通り抜けていくところだ。
その酔っ払いの誰かに声をかけているのかとも思ったが、明らかにその男はこの馬車に向かってきていた。
御者の近くまでやってきて、男はわざとらしく声を潜めて言葉を発する。
「ランベルト家の、執事様の馬車でございますね」
その言葉に御者は警戒心を強める。そのことはごく一部の人間しか知らないし、このような見知らぬ男を使いに出すようなことはない。
「なんのことだ？」
御者の反応は、できる限り驚きや感情を抑えたものだった。それでも、目つきが一瞬険しいものになったのを責めることはできないだろう。後ろに控える護衛が近寄ってくる。そしらぬふりを続けるか、酔っ払いと決めつけて追い散らすか。
見た限り、武器を隠し持っている様子もない。こんなことで主の判断を仰ぐ必要はない……と、急に男が大きな声を上げた。
「一大事、一大事なのでございますよ！　ぜひとも執事様にお取次ぎいただきたい！」
周囲の通行人たちがその声に引き寄せられるようにこちらを向く。心なしか野次馬が集まってきた。彼らの主は注目されるのを好まない。
「ええい、知らん！　誰のことだ、お前は何を言っている？」
「おい、どうした。酔っ払いか？」

護衛の男がやってきて、声を上げ続ける男を小突く。護衛の腰につけた剣鞘を見れば、明らかに堅気ではないことは見て取れるだろう。

エブラムは比較的治安はいいが、市民は護身用に小さな武器を持ち歩くことは多い。とはいえ、たいていは杖や棍棒がせいぜいであり、刃物を持ち歩くようなことはめったにない。そもそも調理に使う刃物以外の刀剣は扱っている店も少なく、高価なのだ。

都市の外に出る冒険者や兵士ほどではないが、短剣や短刀ではなく鞘のついた剣を持つというのは割と珍しい。すなわち、それは暴力を家業にしていることの証とも言える。普通の人間は、これを見るだけでも一歩引くものだ。

「いやぁ、実はですね……それが……」

護衛に威圧されるように男は声を小さくするが、引く様子はない。しどろもどろになりながらも、まだ何か話し続けようとしている。

「……どうしましたか、何か声が聞こえましたが」

馬車の小窓がわずかに開き、中のガラティアから声がかかる。

「はっ、申し訳ありません。何やらわけのわからないことを言う男が。すぐに追い散らします」

彼らの主は、気前は悪くないが失敗と無能への処罰も厳しい。こんなところで機嫌を損ねてはたまらない。しかし、少しの間を置いて返ってきた言葉は、叱責でも了解でもなく、珍しくやや焦りを含んだものだった。

「……急いで馬車を出しなさい。屋敷に戻ります」

「いや、しかし周囲に」

「斬り捨てようとかまいません！」

小声ではあったが、その言葉には明らかな焦燥が感じられた。御者が知る限り、ガラティアがここまで焦った声を出すのは初めてだ。

「出すぞ」

護衛に声をかけ、御者台に上がろうとする。護衛も声を上げ続ける先ほどの男を突き離すと持ち場に戻ろうとする。そのとき、ようやく彼らは周囲の変化に気

づく。
人が多い。
大人が数人並べば幅いっぱいになるような狭い通りだ。小型馬車なら通れるが、大型の馬車が通るにはぎりぎり入れるかどうかというところで、もともと人通りは少ない。そこに人々が集まっている。
「待ってくださいませ！」
御者に縋りつくように男が動く。その動きは先ほどまでとは違い、明らかに御者を馬車から引きはがそうとしている。
「何をしやがる、この野……」
護衛たちは何をしている。怒りを含んだ御者の声はそこで止まった。
別方向から服を引っ張られ、大きくバランスを崩す。近くにいた別の男が無言のまま背後にやってきていたことに気がついたとき、左目の下に焼けつくような衝撃が走る。
男が鉛筆を自分の顔に突き立てた、そう理解したときには、また別の手によって口がふさがれていた。地面に押さえつけられた御者の喉元に、誰かの握ったナイフが押し付けられる。
躊躇なく喉が切り裂かれ、血しぶきが跳ねた。
御者が最後に見たのは、開くことのない馬車の扉と、何人もの無表情な男たち。恐怖と混乱の中、意識は永遠に途絶える。

御者が襲われたのは、すぐに気がついた。先ほどから話しかけていた男はどうやら一人ではなかったらしい。そう考え、動きだそうとした矢先に護衛たちは一斉に襲われた。
衝撃と激痛が一拍遅れてやってきたときに、ようやく襲撃者は一方向からだけではないことに思い至る。わずかに御者の声が響き、押さえ込まれたのかすぐに聞こえなくなる。
前も後ろも、まるで壁を作るかのように人で埋められている。この裏道に通る人の数が増えていたことは偶然ではなく、仕組まれたものだ。そう気づいたときにはもう遅すぎた。

馬車を襲う男たちは荒事に慣れていないし、ナイフや鉛筆のような粗末な武器しかもっていない。だが、人数は既に二桁を超えている。

それでも、それを見ている人々は叫び声一つも上げない。襲い掛かった男の一人を斬りつけたが、他の仲間は声すら上げない。一人倒しても、刺客が減ったように見えない。

この裏道を埋めている男たちは、全員が共犯だ。そう理解したときには既に護衛の男たちの命も尽きていた。

エブラムにエリオットが作り上げた「神殿」で魔物となった男たちの数は、そろそろ三桁に届く。その全員がエリオットの目となり、耳となり、アスタルテの指示で一本の腕として動きだしていた。

その目的は、ただ一人。

※　※

「ねえ、ガチョウのパイが焼けるわ」

「ほんと、もうすぐね。ガチョウが焼けたら次はなぁに？」

「ガチョウの次は、くさーい木の実。焼けて、燻して、はじけるの♪」

「燻して、はじけて、串に刺して。パイができたら召し上がれ♪」

「ところで、ガチョウはどこに行ったの？」

「森の中に置き去りね、お使いはおしまい、おうちに帰りましょ？」

祭りの賑わいの中を、二人の少女が歩く。歌うように、囀るように、楽しげに話しながら。

おそろいの服、おそろいのリボン、よく似通った顔立ちと身体つき。おそらくは双子なのだろう。二人は楽しそうに笑い、人ごみの中からようやく抜け出す。

パレードは近くに来ているが、背の低い彼女たちには直接見ることはかなわないかもしれない。パレードを見るために集まった群衆の中から抜け出す少女たちに目を留めるものがいても、もうすぐパレードが来るのに惜しいとは思っても、おかしいとは思わないだろう。

少女たちが向かう先で急に通り沿いの家の窓が開き、大きな設置式の石弓が姿を現す。それに気づいた人々は悲鳴を上げる。
わずかに見えるのは武装した男たちと、城攻めで使うような機械弓。その家の近くにいた人々は潮が引くかのように逃げ出す。人の流れに逆らうように、少女たちは立ち止まる。
「どうせ、すぐに片づくのにね」
「知らないから、仕方ないわ。だって、知らないんですもの」
「そうね、知らないんですもの」
「ええ、自分たちが出しにされたこともわからないあの四兄弟もね」
目鼻の区別がつく程度に近い距離で起きている戦いも、双子は気にならないようだ。それは、自分たちが被害に遭うことがないとわかっているからこそできる安心。
実際に、一人の騎士が飛び込み、悲鳴が上がる。逃げ散っていた群衆がそれに気づき、歓声が上がる。もちろん、歓声を上げるために配置された人員もいるに違いない。双子に仕事を持ってきた相手は、それくらいするだろうということはわかっていた。

「そろそろかしら？」
「変更の連絡は来ていないもの。何もなければ、そのまま進めるの」
「そうね、そのままね。ガチョウのパイは、もうすぐ作り始めるわね」
「だから、そろそろ戻りましょ？　パイを食べるのは、私たちじゃないもの」
少し待ってから、歓声が上がる中、双子は歩きだす。その背後、パレードを待つ群衆のど真ん中で火柱が上がった。
「ううん、パイを焼くのは真横に来たときにしたかったけど、ちょっと早すぎたかしら……でも、パイを食べるのはあっちの仕事♪」
「わたしたちのお使いは終わったもの、あとは任せま

しょ」

※　※

襲撃を抑え込み、歓声が上がった直後に別の場所で爆発。それは観客たちの足元から上がった。
赤い炎の柱は馬上の騎士の頭の位置よりも高く、規模は大きくなかったが、中心部にいた数名の市民が火達磨になる。悲鳴が上がり、列が大きく崩れる。
直後に黒煙が噴き出す。人や布が焼けるときに出る煙ではありえず、刺激臭がパレードの先頭にまで届く。逃げ惑う人々がバタバタと倒れ始める。道が混み合い、すぐそばの水路に逃げ込む者も多い。
「気をつけろ、魔術か？　……ガスも出てる！」
「隊列を守れ！　人々の避難も優先だ！」
誰かが置き忘れた荷物に注意を払うことは、パレード見物に集まった観衆には難しい。おそらくはその中の一つに爆薬とガスが仕込まれていたのだろう、その程度のことならば、護衛の騎士たちは即座に理解できた。だが、その対処となると即座にできるわけではない。
パレードが狙われることは十分に予測できていたし、警戒していた。しかし、民衆が狙われることまでは想定しきれるものではないし、警戒はしても限界があった。
爆発が起きたのは、主にローランド家の騎士たちが守っている側。馬車の護衛を数名残し、パニックを起こした群衆がパレードに飛び込んでこないように壁を作りに動く。群衆の避難誘導に向かう者もいなくはないが、少数だ。
本来ならば、真っ先にそこに向かって人々を救うべきだ。しかし、今の自分にはパレード護衛の任務がある。
主がいずれ妻とするかもしれない人――今でも、胸の奥がかすかな痛みを訴える――が、まだ狙われている可能性は非常に高い。ここを離れるわけにはいかない。騎士ライラは小さく歯を食いしばる。
「ブレアの騎士よ、ここはローランドとランベルトの騎士たちが守ってくれています。人々の保護を！　ま

だ次があるかもしれません！」
背後から聞こえた声に、思わず振り返りそうになる。
この声は、さっきの伝令の騎士だろう。
若かったように見えたが、他の壮年の騎士たちは何も問いなおすことなく動きだす。もしやあの伝令は高い地位にある人物なのだろうか。あるいは、ブレアの騎士たちは考えていることがまったく同じだったということだろうか。
「オリヴィア殿がすぐそこにいるのだから、伝令に指示をするのは当然か……」
馬車の上では、焦ったように周囲を見渡す魔術師のサラ。隣で座席に腰掛けているオリヴィアは落ち着いた様子で周囲を見回している。
自分が狙われていることはわかっているだろうに、それでも観客のことを心配し、自分の部下たちにはその対処を優先させる。その決断をライラは好ましく思うし、初めてオリヴィアという女性の本質を垣間見た気がした。
「……なるほど、エリオットが言うだけのことはあるな」
口元にわずかな微笑みが浮かぶ。人々の悲鳴はまだやむことはないが、対処が早かったせいか、大混乱にまでは陥っていない。
この爆発と煙は、観客を狙ってパニックを起こすことが目的だろう。実際に、パレードの動きは止まり、兵士も騎士たちも対処に追われている。一歩間違えば、オリヴィアの馬車は群衆に呑まれていてもおかしくない。
もし、暗殺者ならばここを狙わないわけがない。つまり、今こっちに近づいてくる中で妙に落ち着いた動きをする者がいれば、それが暗殺者だ。
ライラは兜の面当てを外し、視界を広げて周囲を睨みつける。
「魔術師！　右前の群衆に気をつけろ！」
ライラの声は、馬車の上にいるサラの耳に届いた。
見れば、ライラは指示した方向に馬を進めようとして

いるが、逃げ込んでくる群衆の流れに阻まれている。つまり、そこに何か危険な相手がいるということなのだろう。

しかし、馬車の近くは騎士たちが壁を作っている。群衆の数が多いといってもそこを抜けてくることはできていない。飛び道具だろうか？

その群衆の中に、襤褸をまとった小柄な人影を見つけて警戒の度合いは一気に高まる。見られている。視線を感じる。明らかに、あの人物は自分のことを見ていた。

反射的に手に持った触媒の小箱を置き、慣れない障壁のまじないの詠唱を始める。弓矢よけの魔術は学院で習う一般的な魔術だが、サラはあいにくこの手の魔術には適性が低かった。

呪文の詠唱が終わる前に、襤褸の男が動いた。

「うふふ、うふふ？　未熟な魔法はなくしちゃお？　手元の小箱もなくしちゃお？」

サラが見た光景は、こういったものだ。

襤褸の男の前にいた男性が、悲鳴を上げて崩れ落ちる。襤褸の男が、倒れた男の足元から何かを回収し、倒れた男の背中に駆け上がる。目の前にいた別の男を突き飛ばし、護衛の騎士の馬にぶつける。護衛が体勢を立て直すわずかな隙に一気に飛び上がる！

「くっ⁉　星の杖より来たれ……！」

呪文の詠唱を切り替えようとするが、間に合わない。襤褸の男の身体の中から、腕のような太さの影が飛び出し、手に持った杖と、触媒を入れた小箱を弾き飛ばす。

サラは杖も小箱も捨て、必死でかわす。サラがいた場所に、キラキラと光る小さい何かが突き刺さる。おそらくは、含み針。

「触媒に頼る呪文使いなんて、あっという間にボロクズさ。いたぶる時間がないのは残念だけど、ついでにちゃんと殺してあげるよぉ⁉」

それがルベリオの護衛についていた「三号」と呼ばれていた人物だろうというのは、サラにだけはわかっていた。エリオットが戦いに不向きとはいえ、静かな屋内で直前までその存在に気がつくことができないほ

どの隠密の使い手で……杖と触媒を弾き飛ばした、三本目の腕の正体は、蛇。あの襤褸の中に、あとどれだけの蛇を飼い慣らしているのか。

馬車の上に降り立ったこいつとまともにやりあえば、魔術師のサラに勝ち目はない。周囲の護衛の騎士たちが反応するころには、サラとオリヴィアは物言わぬ骸になっているだろう。

馬車への着地の直前、三号と呼ばれた暗殺者は、どう効率よく処理するか考えながら次期女領主と魔術師の位置を確認する。本来ならば本目的である次期女領主が先だが、護衛の魔術師を殺してから絶望的な顔を見るのも捨て難い。どうせ、この混乱の中で逃げ出すなんてたやすいことだ。少しくらい自分の好きなようにやってもいい。

しかし、その思考は一瞬で止まる。次期女領主がこちらに興味がないかのように前を見ていることもそうだが、杖も触媒も失ったはずの魔術師が、その腕に、背後に、複数の火の精霊を呼び出している。

「馬鹿な、お前は触媒が……」

「来たれ！　強き火蜥蜴(サラマンドラ)たち!!」

触媒も、杖も使わない短縮詠唱。つぶやきが声になる前、脚が馬車に届くその前に。都合四回の炎の槍が襤褸の暗殺者に直撃し、一瞬で暗殺者は炎に包まれ、燃え尽きて黒い炭となる。

「……まさか、本当に触媒の箱を狙ってくれるとはね。おかげで命拾いしたわ」

それはすなわち、この暗殺者はランベルト家のあの二人だけに見せた偽装情報を知っていたということ。

「魔術師、足元だ！」

その声に足元を見ると、残された大蛇が迫っていた。人の腕ほどの太さを持つ大蛇は、毒を持たない場合でも馬を絞め殺すことがある。そして、大きく開いた口腔に、ぬめりをたたえた牙が光る。

大蛇はオリヴィアの足元をすり抜けサラのもとへ。避けられない、そう理解したときに馬車が大きく揺れ、蛇の動きが止まる。

「今のうちに、オリヴィアさまを奥に！」

馬から飛び込んできたライラが、蛇の胴体に剣を突

き立て、釘付けにしていた。サラの目から見てもその剣は明らかに魔術による付与が行われた高級品で、こんな荒っぽい使い方をするものではない。だが、ライラという騎士は迷わなかった。
蛇はサラから注意をそらし、ライラに向けて鎌首をもたげる。金属の籠手が拳を握り、蛇の口に正面から叩き込まれる。呆然とするサラの前で、女騎士ライラは大蛇を押さえ、腰の短剣で二箇所目を打ち付け、とどめを刺す。
襤褸の男が飛び出してから、実時間にすればほんの数呼吸の出来事だった。
「……ライラっていったっけ、礼を言うわ。あんた、ランベルト家の騎士にしとくにはもったいないわよ」
「……いや、なんだ。お互いに職務を果たしただけなのだから、気にする必要はない……言葉遣いは悪いが、貴方は礼儀正しいな」
お互いに顔を見合わせ、照れくさそうに言葉を交わす。
ここで起きていたことに気がついた観客の一部が歓声を上げる。
「サラ、ライラ！　すぐそこから離れて！」
その声は、馬車の後ろに接続された荷物置きであり休憩所となる客車から発せられた。
サラはぎょっとした顔になり、ライラはその声に一瞬思考が止まる。その声は、彼女もよく知る男……エリオットの声だった。

※　※

「エリオット！　大変大変！　教会の窓が開いて、中に弓を持った人がいるの！」
ネムから入った連絡は、最悪の予想を裏付けるものだ。教会の内部に敵側の人間がいて、狙撃に適した場所を提供する。考えなかったわけではないが、胃が締め上げられたような気分になる。
「ネム、妨害はできる？　見つかったら君が危ないから、できるだけ上から……」
教会近くは常に狙撃に適した場所として危険視していた。ネムをわざわざその近辺に張り付けていたのはそのためだ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
TEL.03-3555-3431(販売)／FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。
本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。
また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

http://ktcom.jp/